

---

# 戦場の風

あの人

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

戦場の風

### 【Nコード】

N5814C

### 【作者名】

あの人

### 【あらすじ】

若き傭兵の青年は、四カ国が魔導兵器を奪い合うなか戦場を仲間と共に駆け抜ける。争いの先にあるものは？

## プロローグ『世界』

世界は混沌に包まれていた。

その世界は魔法が存在する。

そしてその世界には4つの国があり、それぞれの資源、鉱物、魔法物などを奪い合い争いが絶えなかった。

北の鉱物などに恵まれた国

『ファクトリー』

南の自然の資源に恵まれた国

『ガーデنز』

東の魔法物に恵まれた国

『アルタイム』

西の国民からの信頼が厚い小国

『アカツキ』

そして…4ヶ国のどこにも属さない資源の豊富な大陸がある。

その大陸を支配しようと4ヶ国は信念・欲望・想い・信頼を掲げ争う。

物語の舞台はその大陸

『ライン』

から始まる…

## 第1話【傭兵団】

夜の闇の中。

戦が終わった後なのか傭兵団がキャンプをしている。

傭兵らしきいかつい男達が酒を飲み食事や戦で負傷した傷を治療したりしている。

少し離れた所にまだ若い傭兵が2人、焚き火をして座っている

片方は深緑の様な緑色の髪をしており髪を後ろで束ねている、右目に傷がある若い人物。

その傭兵の隣には黒髪で不健康そうな傭兵が酒を片手にうなだれている。

不健康そうな傭兵がおもむろに口を開く。

「…なあカイル…今夜は襲って来ると思うか？」

「今夜は来るだろうな、ロック」

カイルと呼ばれた緑髪の傭兵は、不健康そうな傭兵…ロックに答える。

「はあ…めんどくせえ… 大体將軍は何を考えてるんだか…」

「あの人の考えはわからないからな」

「おう！！ワシの事を呼んだか？？」

カイルとロックは弾かれた様に立ち上がると、鎧を着込んだ顔に大きな斜めの傷がある大男が目の前に現れる。

「げっ… ガイル將軍…」

この現れた男はカイルとロックの所属している傭兵団の雇い主。

そして魔法国『アルタイム』軍の中将。

また『爆風の嵐』の異名を持つ人物。

「何か用ですか？ガイル中将」

カイルはニヤリと笑いながらガイルに言う。

「そう堅苦しくなるなカイル！！」

そう言いながらカイルとロックの肩をバシバシ叩く。

カイルとロックは何気なくガイル將軍と長い間戦場を共にしている。

「ガイルのオッサン…これからどうするんだ？」

「一晩経つたらすぐに出発するつもりだロック」

とガイルはロックに言いながらロックの酒を奪い一口飲む。

「とりあえず、アルンの本拠地に向かうのですか」

「そのつもりなんだがな…」

その時別の傭兵が駆けてくる。

「將軍！……！『ファクトリー』の夜襲です！……！すぐに指示をお願いします！……！」

「ガハハハハ！……！『ファクトリー』めやはり来たか！……！カイル！ロック！戦いだ！……！」

カイルとロックは各々の武器を担ぐ。

カイルは長い刀を。

ロックは槍を。

ファクトリー軍との戦いが、今始まる……



「クソッ… ロック!!!」

カイルはロックに駆け寄る。

カイルとロックはお互いに背を預けた格好になった。

「本当にゴキブリかこいつら…」

ロックが呟く。

まさに人海戦術だ。

人の波が押し寄せてくる。

「ガイル將軍は無事か？」

「ガイルのオッサンならまだまだ元気みたいだぜ」

ロックが指差す方向ではガイル將軍が雄叫びを上げながら馬鹿デカイ斧を振るい、敵兵を吹き飛ばしていた。

「流石ガイル將軍…」

と呟きながらカイルは刀で1人2人3人と斬り倒していく。

ロックも次々と槍で敵兵を突き刺していった。

その時だった。



カイルとロックを包囲していた一部の敵兵が吹き飛ぶ。

「今度はなんなんだよ！！！」

ロックがカイルの近くで叫ぶ。

「お前ら無事かあ！？」

「げっ…団長…じゃなくて

マヒロの姉さん！！！」

そこに現れたのはカイル達の傭兵団の団長、真っ赤に燃える様な髪が特徴のマヒロが炎と共に飛び込んできた。

「マヒロさん！！！！大丈夫ですか！？」

カイルは敵兵を引き付けながらマヒロに問う。

「アタシは大丈夫だ！！お前らも無事だね！？」

とマヒロが叫びながら手から火炎を放つ。

団長マヒロは火の魔法を得意とする人物。

そして団長と呼ばれるのを嫌う。

昔ロックが団長と呼んでフルボッコにされた。

「姉さん！！この状況ヤバいつす」

「馬鹿野郎！！お前男だろ！泣き言言っんじゃねえ！！」

とマヒロが怒鳴りながら敵兵を蹴り飛ばす。

カイルはマヒロさんがあんな細身でどこから力が出ているのかを不思議に思いながら、紙一重で敵の斬りつけをかわす。すると突然、

「があああああ！！！！！！」

ガイル将軍がカイル達の目の前に敵兵を吹き飛ばしながら現れた。

「将軍！！！！大丈夫ですか！！！！」

カイルが問う。

「当たり前だ！！！！！！」

ガイルが斧を振り回しながら答える。

「将軍！！！！そろそろ不味いんじゃないかしらねえ！！！！」

「マヒロか！！！！大丈夫だそろそろ時間だ！！！！」

ガイルがニヤリと笑う。

その時だった。

大きな歓声が響く。

「オッサン！！！！援軍だ！！！！援軍が来たぞ！！！！」

「ガハハハ！！！！！！一気に援軍と共に畳み掛けるぞ！！！！」

「よし！！！！マヒロさん！！！！ロック！！！！行くぞ！！！！」

後は一方的にアルタイム軍が攻めた。

援軍の力は凄まじく、あっという間にファクトリー軍は敗走にまで追い込まれた。

「勝った……」

カイルは呟く。

「ほらほらボサツと立って無いで怪我人運ぶの手伝いなカイル！！！！」

もうすでにロックは怪我人を担いで走り回っている。

カイルは幾つもの修羅場をくぐり抜けてきた。

今回よりも苦戦した戦も生き抜いてきた。

だが彼の物語は今始まったばかりだ。

彼はこれか何を見て何を想いどう生き抜くか……

### 第3話〈行軍〉

夜が明けた。

昨日の戦いが嘘の様に晴れ渡る空。

ガイル將軍の軍と傭兵団はいまアルンの本拠地に向かい行軍している。

「あちい…あちい…」

さつきからあちいあちいと壊れたラジオみたいにリピートしている  
ロックを無視して歩くカイル。

すると後ろから声が響く。

「おう！！カイル昨日は頑張ったのう」

とガイル將軍が高らかに笑いながら近付いてきた。

中將と言う位の高い人物が馬を使わずに歩くとは珍しい光景だ。

「將軍…なんで馬にのらないのですか？」

理由はわかっているが一応聞く。

「ガハハハ！！！！兵の立場にならないと分からない事があるのだ  
よ！」

ガイル將軍は兵と共に駆け、寝、食事、兵と同じだ。

だからこそ兵からの信頼も厚い。

「しかし…ロックは大丈夫か？」

ガイルがカイルに問う。

正直今のロックは酷い顔をしてうなだれながら歩いている。

まさにゾンビのようだ。

聖水をかけたら溶けてしまいそうな感じだ。

「大丈夫ですよ…多分…」

「ならいいんだが…」

「將軍どうかされましたか？」

珍しく表情を曇らせたガイルにカイルは問う。

「…ここだけの話だが…最近アルタイムの上層部の動きが怪しいのだ」

「アルタイムが？」

アルタイムはガイル將軍が所属している国。

魔法国と呼ばれる程、魔法物に恵まれた国。

ガイルに雇われている傭兵団に所属しているカイルは間接的にアルタイム軍に所属しているという事になっている。

「上層部が何やら大量の資源を使い、大陸1つ吹き飛ばす程の魔導兵器を作ったらしいのだ。」

「大陸1つ……！」

「ワシは早く争いがなくなれば良いと思い戦場を駆け回ってきた。やはりガイルはこういう人物だと痛感したカイルだった。」

「しかし今回の魔導兵器を使いアルタイム軍上層部はガーデنز、ファクトリー、アカツキ国を滅ぼすつもりらしい。」

「大陸1つ吹き飛ばす程の国に向けて使ったら……何万……何億もの罪の無い人々が死ぬことになるの……」

ガイルの拳が震える。

「もしも上層部がそう考えているのなら……ワシは……ワシは……」

ガイルの顔がけわしくなる。

「將軍。」

カイルがガイル將軍の言葉を遮る。

「自分は將軍に付いていきますよ」

「俺もだぜオッサン……！！！」

ゾンビになっていた筈のロックが話を聞いていたのか急に口を挟む。

「お前ら…」

本当ならこのまま3人で抱き合う雰囲気なのだが、ガイル將軍の馬鹿力を考えて止めておく。

「あんたら…何してるのさ？」

「おわっ！マヒロ姉さん！」

ロックは昔のフルボッコにされた事をトラウマにしているのか、マヒロ姉さんが現れると決まって驚く。

「おう！マヒロか！どうしたんだ？」

「將軍：昼だし休憩にしないかい？將軍の兵と傭兵団の馬鹿共、昨日の疲れがまだ残ってるみたいなんだよ…」

マヒロ姉さんが母親の様な顔をして言う。

「うむ、確かに昨日は苦しかったからのう…よし！休憩を取るか！」

ガイル將軍は部隊長らしき兵を呼び休憩を取る旨を伝える。

しばらくすると兵士や傭兵達がキャンプをし始める。

「ようやく休める…」

ロックは草むらに倒れ込む。

「お前相変わらず暑さに弱いな」

カイルはそう言いながら本を懷から取り出し、読み始める。

「何を読んでいるんだよカイル」

「魔法書だよ」

「そういえばカイルあんた魔法苦手だったわね。」

「うおっ！！マヒロ姉さん！！」

マヒロが水筒を持って現れる。

ロックはお決まりの様に驚くがマヒロは気にしない。

「ほら、あんた達の方だよ」

持っていた水筒をロックとカイルに投げるマヒロ。

「ありがとうございますマヒロさん」

カイルはお礼を言うと水筒の中を口にする。

乾いた喉に染み渡るようだ。

「カイルあんた剣術は上手いんだけど魔法がさっぱりだからねえ…」

マヒロがカイルから魔法書をつまみ上げる。



「そうそう！魔法が使えないって言うと、アルンの本拠地にいるロスト中將も使えないらしいぜ」

ロツクが思い出した様に言う。

ロスト中將。

ガイル中將と並ぶ猛將。

噂なら聞いた事がある。

まだ若くして中將の座に就いた人物。知略も去ることながら武力のみで中將にまで登り積めた。

また、いつも漆黒の様な鎧に身を包み巨大な大剣を携える姿から『漆黒の死神』と敵国からは恐れられている人物。

「ロスト中將ねえ…」

マヒロが懐かしそうに呟く。

「マヒロさんどうしたんですか？」

「なんでもないさ！

ところでカイル、さっきガイル將軍があんたを呼んでいたよ！」

「えー！俺は俺はー？」

ロツクが不満そうに呟く。



た。

「中将、どうぞこちらへ」

「すまん」

とガイル中将は一言兵に言つと、

カイルを手招きしながらテントの中に消えた。

カイルは立っている兵に一礼して、テントの中に入る。

テントの中は縦長のテーブルがあるだけでシンプルだった。

「將軍、それで話とは…？」

「うむ…」

カイル、さっき話た魔導兵器の事は覚えているな…？」

「はい…」

「今回ワシらの軍がその魔導兵器をアルンの本拠地からオリオンの砦に運ぶ任務を命令されたんだ。」

カイルはガイルが何を考えているのかわからない。

「將軍…それは…まさか…」

ガイルはニヤリと笑う。

「アルタイム国に喧嘩を売るぞ」

#### 第4話【反逆の狼煙】

「將軍…本気ですか？」

カイルはガイル將軍に問う。

「ああ…これしか手段は無い。  
魔導兵器を奪う…。」

「しかし…どうやってアルンの本拠地を攻めるのですか…？」

アルンはアルタイム軍のラインでの2番目に大きい基地だ。

それに…アルン基地には彼が…

『漆黒の死神』ロストⅡカイツ中将が駐屯している。

「ロストの若僧も問題だが…。

本当の問題は…『十三武神』に数えられている…男…

『究極の鉄壁』アルベルトⅡカインズ」

アルベルトⅡカインズ…その名前を聞いただけでカイルは鳥肌が立った。

「アルベルトⅡカインズ…十万で攻めてきたガーデンズ軍を僅か五千の兵で皆を守り抜いた人物じゃないですか…」

「奴は恐ろしい奴だ…しかしこちらには策がある…それに援軍もな」

ガイルは不敵に笑う。

「援軍？」

「時が来ればわかるだろうよ」

ガイルはそう言つと地図を取り出し机に広げる。

その時、

「將軍！入るよ！」

声と共にマヒロが入ってくる。

マヒロの後ろにはまた死にそうな顔をしているロックがいる。

「マヒロか！！ロックと傭兵団の奴らに説明したか？」

「傭兵団の馬鹿共はやる気まんまんさ！」

「そうともさ！やってやるよ！」

そう呟くロックの顔に輝きが戻る…が元々不健康な顔をしているので相変わらず死んだ魚の様な目をしている。

「とにかく、魔導兵器は…ここにあるはずだ。」

とガイルは地図上のアルン基地の北東の建物を指差す。

「情報が正しいならばここの建物の地下にあるはずだろう」

「將軍…情報は一体誰から…」

「おう忘れてた忘れてた…カトル！こっちへ来い！」

「カトル?...まさか...」

ロックが呟く。

するとテントの中に黒髪で眼帯をした背中に巨大な弓を背負った男が現れる。

「やっぱりあんたか!!!!兄貴!!!!」

ロックはカトルと呼ばれる人物を指差しながら叫ぶ。

「兄貴ってロックあんた兄貴いたのかい？」

「兄貴いいいい!!!!」

ロックはカトルに向かい走りだす。

普通ならここで抱き合い感動のシーンの筈が...

「死に腐れええええ!!!!」

急に叫びながら殺気全開のロック。

「甘え!!!!ガムシロップより甘え!!!!」

と叫ぶカトル。

カトルはロックの右フックを避けると、  
回し蹴りを放つ。

しかしロックはそれを側にあった椅子でガードする。

宙に舞いバラバラになる椅子。

啞然とするカイルとマヒロ。

打撃戦を展開するロックとカトル。

馬鹿だ本当に馬鹿だ。

すると突然ゴツン！と何かがぶつかった音がする。

ガイル將軍がロックに向けて鉄拳を振り落ろしたのだ。

「ぐえっ…！」

というロックの断末魔と共に地に伏し動かなくなった。

「とりあえずこいつがカトルだ。

ロックの兄らしい。

こいつはロストの部下で位は大佐。

情報はこいつが提供してくれたんだ。」

とガイル將軍が何事も無かったかのように紹介する。

「よろしく。家の愚弟が世話になっております。」

とカトルは一礼。

「で…結局攻め方はどうするんだい？」

マヒロがウンザリしたように聞く。

「二手にわけろ。」

ワシの軍にカトルとカイルを加えて、アルンに入る。  
傭兵団とマヒロとロックは外に隠れて待機していてくれ。

「

「了解だオッサン」

いつのまにか起きていたロックが頭をさすりながら呟く。

「そして夜になったら派手に合図を送る。」

そしたらマヒロ達はアルンに突っ込んで来てくれ。」

「魔導兵器を奪ったらどうするんだい？  
かなりの追撃が来るっばいよ」

マヒロが髪をいじりながら聞く。

「その後はラスクの砦に向かう。」

「ラスク！？あそこはアカツキ軍の砦じゃないですか！」

「この戦いが成功したらアルタイムとは縁を切る事になる。」

アカツキにはちよいとした友人がいてな、訳を話したら快く了解してくれだよ。」

とガイルは話す。

「つまりアルタイムからアカツキに所属を変える…という事ですか」

「ああ、そういう事になるなカイル」

一国を敵に回す。



だが敵に回さなければ罪の無い人々が死ぬ事になる。

「作戦はこれくらいだ。」

とガイルが言う。

「アタシは傭兵団の奴らに伝えて来るよ」

マヒロはテントを後にする。

「マヒロ姉さん俺もいきやす！」

ロックはマヒロを追う。

「ワシらも解散するかのう」

とガイルがテントから出る。

「カイル君、頑張ろうな！」

カトルはそう言い残してテントを去る。

カイルはテントから出た。

空が透き通る様に青い。

嵐の前の静けさか。

軍はアルンに向けて行軍を再会する。

## 第5話##嵐の前の静けさ##

アルン本拠地まであと1・2kmの位置まで行軍した。

「マヒロ！傭兵達に隠れて待機だと伝えてくれ！」

とガイルがマヒロに頼む。

「了解だよ將軍！」

ほら野郎共さっさと隠れる隠れる！！！」

すぐそばにある森に傭兵達は次々と身を隠す。

「カイル！死ぬなよ！！絶対だからな！！！」

ロックが手を振りながら木の陰から叫んでいる。  
その隣でマヒロさんも手を振っている。

「大丈夫だロック！！お前もヘマするなよ！！！」

と笑いながら叫び返す。

「カイル君ほら行くよ！」

カトルさんが待っていてくれている。

急いでカトルさんに駆け寄る。

「カトルさんすいません……」

「謝らなくてもいいのに」

と苦笑しながらカトルは呟く。

「お前ら！気合い入れろよ！！」

とガイル將軍が周りを一喝する。

しばらく進むとアルンの本拠地の正門が見えてくる。

「いよいよですね……」

「ええ…カイル君頑張ろうな！」

正門をくぐり抜け、兵舎らしき建物の前に誰かが立っている。

金髪でオールバックの男だ。

「ロスト中将出迎えご苦労！」

とガイルが金髪の男…ロスト中将に言う。

「ガイル中将こそ行軍お疲れ様です。それにカトル、お前も案内ご苦労様。」

カトル、ガイル中将の軍を兵舎に案内してくれ」

「了解しましたロスト中将」

カトルが先頭になり兵舎に入っていく。

兵舎は広く、カトルがカイルを部屋に案内した時にはほとんどの兵が部屋でくつろいでいた。

「カイル君、僕の部屋は隣だからね。

…そうそうガイル中将が後で俺と一緒に部屋に来てって言ってたよ。

」

「カトルさん、わかりました。」

「それじゃ少し俺は寝るよ。

おやすみ」

手を振りながらカトルは部屋に入って行った。

一人になったカイルはしばらく自室で武器を磨く事にした。

長年使い続けてきた武器…長めの刀。

名前も無く誰が造ったのか分からない。

自分と同じだと苦笑する。

カイルは親の顔を知らない。

何故ならカイルは傭兵団に拾われ傭兵団に育てられたからだ。

カイルと言う名前も傭兵達が名付けた。

只カイルは過去を知ろうとしない。

むしろ知らない方が良いと自分に言い聞かせている。

カイルが目を閉じて考え事をしていると、

「カイル君！ガイル中将の所に行くよ！！」と外から声が響く。

刀を鞘にしまい、腰に携える。

「カトルさん、行きましょう。」  
とカトルに促す。

しばらく歩くとガイル中将の部屋に着く。

カトルはドアを軽くノックし、

「中将、失礼します。」

と言言い、ドアを開けて中に入る。カイルもカトルの後に続く。

「おう、来たか。」

ガイルが腕を組みながら椅子に座っていた。

「將軍、ご用件は？」

「うむ。最終確認のために呼んだのだ。」

ガイルは懷から地図を取り出し机上に広げる。

「まず、ワシの軍とカトルで魔導兵器がある建物の反対側で騒ぎを起こす。

カイル、お前はその隙に建物に向かってくれ。

途中に『奴』がいるからそいつと合流して、魔導兵器を奪え。」

「奴？將軍、奴とは？」

將軍はニヤリと笑いながら、

「入って来てくれ。」

と誰かを呼ぶ。

すると全身漆黒の鎧を着込んだ人物…そう彼がドアを開き部屋に入ってくる。

「え…！ロスト中将？」

カイルは驚きの声をあげる。

「ガハハハハ！驚いたかカイル！！」

とガイル將軍は高らかに笑う。

「カイル君。流石に俺だけじゃ魔導兵器の場所を探るのは無理だね。」とカトルが言う。

「あー…さつさと説明頼むよ、ガイル中将。」

ロスト中将が髪を撫でながら呟く。

「悪い悪い。」

とにかくカイルお前は途中でロストと合流してくれ。」

「そこから先はカイル、俺に着いてきてくれ。」

とロストがカイルを見ながら言う。

「ただ…問題があるので…」

とカトルが低く唸る様に呟く。

「目的の建物の横に『究極の鉄壁』アルベルト大将の兵舎があるのです…」

アルベルト大将…『十三武神』の一人。

「アルベルトはワシらが引き付ける。そのため大暴れするからう。」

「ところで魔導兵器とはどのような物なのですか？」

カイルが疑問点をぶつける。

「悪いが…よく分からないんだよ。确实なのはそこの地下の奥に魔導兵器があるという事だ」

ロストが答える。

「とにかくカイル、ロストお前らが魔導兵器を運び出したらワシが外にいるマヒ口達に派手に合図を送る。」

ガイル將軍は立掛けてある長い筒を指差しながら言う。

「その大筒で合図か…派手になるな…」

ロストが笑いながら呟く。

「マヒ口達が突っ込んできたらワシらはマヒ口達と共に撤退する。お前らは合図が上がったら魔導兵器と共に戻ってこい。」

「その後はアカツキのラスク砦まで逃げる…と言う訳だ。」

最後にロストが付け足す。

「ラスク砦に着いたら、アカツキ国王の一人息子のあいつが迎えてくれるだろう。」

「あいつか…久々だな…」

ロストが苦笑しながらガイルに呟く。

「將軍…そろそろ日が暮れて来ましたよ…」  
カトルが言う。

「よし…行くか…」  
カイル！ロスト！死ぬなよ…！」

ガイル將軍はそう強く言っているとカトルと共に外に出ていく。

「カイル！先に俺は行くぞ。  
また後でな。」

ロスト中將もそう言い残し出ていく。  
作戦決行は夜だ。

カイルは少し自室で休む事にする。

魔導兵器は一体なんなのか…

様々な考えが頭の中で混ざり合う。

そして…作戦決行の時が近づく…



## 第5話までの重要人物の紹介

カイルⅡラフォーレ

物語の主人公。

深緑の様な深い緑色の髪を頭の後ろで束ねている。

あと右目に縦の傷がある。

年齢は18才。

産まれの経緯は不明。

使用武器は長い刀。あと魔法が全く使えない。

ロツクⅡラオツクス

カイルの古くからの親友。

特徴は黒くボサボサしている髪型と、いつも不健康そうな顔。

口癖は

「めんどくせえ」

年齢はカイルと同じ18才。

家族構成は不明だが兄がいる。

使用武器は主に槍。

ガイルⅡゴードン

アルタイム国の中将。

性格からか兵達からは慕われている。

カイルとロツクそしてマヒロとは長い付き合い。

特徴は浅黒い肌と短い髭。

顔には斜めの傷がある。

年齢は37才。よく40代に間違われる。

使用武器は巨大な両刃の斧。  
以外と魔法が得意。

マヒロックレイド

カイルとロックの所属する傭兵団の団長。  
肝っ玉姉さん。

団長と呼ばれるのを嫌い、時たま優しい姿を見せる。

特徴は燃える様な赤い髪。髪は短い。炎系の魔法が得意。

アルタイム国のロスト中将とは知り合い。

年齢は20代中場。

使用武器は主にレイピア。

カトル・ラオックス

ロックの兄でありロスト中将の右腕。

位は大佐。

特徴は黒髪と左目の眼帯。

背中には巨大な弓を背負っている。

弟のロックとは仲が悪い。

年齢は23才。

使用武器は巨大な弓。

ロスト・カイツ

アルタイム国の中将。

ガイル中将とは師弟の様な関係。

特徴はいつも着ている漆黒の鎧と金髪のオールバック。

魔法が使えないらしい。

別名『漆黒の死神』

年齢は26才。  
使用武器は巨大な大剣。

## 第6話 反逆。そして…へ

外から怒号や叫び声、そして火の手が上がり始める。

始まった。

カイルは兵舎から飛び出す。

視界の端ではカトルが巨大な弓を操り矢を雨の如く降らせている。  
カイルはロストとの合流地点を目指す。

アルンの本拠地は広いそして複雑だ。

建物と建物の間を縫うようにして駆けていると、突然目の前に兵士の部隊が現れる。

「おい！そこのお前！何処に行く！？」部隊長らしき男がカイルを指差しながら怒鳴り散らす。

まずい。

バレたらガイル將軍達の作戦が無駄になる。

色々と考えていると、

しびれを切らした部隊長が

「聞こえないのか！？

もう一度言っ。

何処に行くつもりだ！？」

強行突破しかない。

ロスト中将との合流地点は近い。

早く行かなければまずい。

刀の柄を強く握る。

その時だった。

カイルの視界の端から黒い影が飛び込んでくる。  
兵士達も気付く。

黒い影は次々と兵士達を殴り倒して行く。

部隊長は素早く剣を構え影を切りつける。  
だが遅い。

影は剣を避け、部隊長の男に蹴りを喰らわす。  
部隊長の男は地に倒れ動かなくなった。

「やっぱり面倒な事になっていたか…来てよかった…。」

黒い影が近付いてくる

暗闇なのでわかりにくいがロスト中将だ。背中には巨大な剣を背負っている。

「中将、すいません…助かりました…」

カイルは柄から手を離し一礼する。

「時間が無い…行くぞ！」

ロストが駆けだす。

カイルも後を追いつ、駆ける。

何度か敵の兵に遭遇したがやりすごした。

それから少し進むと少し大きな建物が見え始める。周りには兵の姿が見えない。ガイル將軍達が頑張ってくれているようだ。

「あれだ…あれの地下の奥に魔導兵器がある…」

ロストが呟く。

「どうやって侵入しますか？」

「地図を見る限り、正面の扉しか出入口しかない。」

「つまり…」

「突っ込むぞ…！」

ロストは背中の大剣の柄を握りしめる。

「わかりました！」

二人は駆け出す。

後80m位だろうか

そこまで駆けた。

だが次の瞬間、辺りに火がともりロストとカイルの姿が照らしだされる。

「クソッ……！ばれていたか……！！！」ロストがすぐに背中から大剣を取り出し構える。

カイルも刀を鞘から引き抜く。

その時だった。

「カイル！！！！横に飛べ！！！！！」

ロストが急に怒鳴る。

カイルは思いきり横に転がった。

カイルとロストがいた場所に無数の矢が突き刺さる。

「そうか…裏切ったのはお前か…！！」

ロストが怒りに震えながら呟く。

「その通りですよロスト中将！」

建物の上には…：ガイル將軍と共に戦っている筈の…：そうカトルが怪しく笑いながら立っていた…。

「カトルさん！！！！何故あなたが…裏切るなんて…！！！」

カイルはカトルを睨みながら怒鳴る。

「馬鹿馬鹿しい！それに強い方に味方するのは基本ですよ基本！！！！」

カトルはカイルが見たことの無い程おぞましい顔で叫ぶ。

「そうだ。カトル大佐は正しい選択をしたのだ。」

低く唸る様な声が響く。

「アルベルト大将…！！！」

ロストが呟く。

正面から巨大な…：スキンヘッドで全身分厚い鎧に身を包み右手に巨

大なハンマーを持っている男…

『十三武神』の一人…アルベルト大将が現れた。

「ロスト中将…！お前が反逆するとは思ってもみなかったぞ…！」  
アルベルト大将が怒鳴る。

「アルベルト大将…！自分は自分の想いに素直になっただけだ…！」

「ガイル中将か…！」

アルベルトはロストを睨みながら指差す。

カイルは指差す方向を見る。

そこには鎖で拘束されたガイル中将が兵に引きずられて現れた。

「將軍…！！！！大丈夫ですか！？」

カイルはガイルに問掛ける。

「ワシは大丈夫だ…！！まんまとはめられたがのっ…」

ガイルはうなだれながら答える。

「クソッ…ロストさん…マヒロさんとロックが外に待機しています  
…どうにかして合図を…」

「そっぴえば外に虫がいたな…！！  
今ごろ私の誇る軍に皆殺しにされているだろうよ…！！」

アルベルトはカイルとロストの唯一の希望を砕いた…つもりだった。



「へっ…マヒロの野郎がそう簡単にくたばるかよ……！」

「ロックはゴキブリ並にしぶといからな…あいつは死なない……！」

逆にカイルとロストに火が付いた。

「ならばお前らが死ねい……！」

アルベルトがしびれを切らし突っ込んでくる。

「カイル！お前は周りの雑魚を頼む……俺にアルベルトは任せろ  
……！」

ロストは大剣を構え走りだす。

「わかりました……！」

カイルは敵兵の中に突っ込む。

左から剣が振られる。避ける。

正面の敵兵を斬る。

刀を全力で振るう。

2・3人の首が飛ぶ。

敵の突きが頬をかすめる。

怯まずにその敵の体を斬る。

ガイル將軍さえ助けられれば戦局が変わる筈とカイルは考える。

しかしガイル將軍との間には敵兵が何十人もいる。

魔法が使えれば…とカイルは自分の力の無さを呪った。

視界の端では僅かだがアルベルト大将とロスト中將の死闘が見える。  
だが今のカイルにはロスト中將の事を心配する余裕が無い。

多分ロスト中將も同じだろう。  
気を抜けば容赦なく殺られる。

カイルは雄叫びをあげる。  
兵が一瞬怯む。

カイルは斬り進む。  
ガイル將軍を助けるため。  
1人2人3人4人5人……………  
次々と斬る。

その刹無、前方から爆炎が上がる。  
今まで何度も見てきた炎だ。

カイルの側まで槍を構え突っ込んで来る見慣れた不健康そうな男。

「ロツク！！！！！」

カイルは叫ぶ。

「無事か！？カイル！」

「大丈夫だ！！！！！」

カイルが返事をした瞬間、周りを囲んでいた兵士達が吹き飛ぶ。

「ガハハハ！！！！マヒロ、ロツク、よくやった！！！！カイルも  
よく踏ん張ったな！！！！」

「將軍を縛ってた鎖、堅いったらありゃしない！」

ガイル將軍を助けたのはマヒロさんだろう。

ガイル將軍は今までの鬱憤をはらすかの様に斧を振り回し敵兵を薙ぎ倒していく。

だが敵兵の勢いは止まらない。

カイル・ロック・マヒロはまた敵に囲まれてしまった。しかもガイル將軍は孤立してしまっている。

建物の側ではロストとアルベルト大將は死闘を繰り広げている。

ロストは内心焦っている。

マヒロが生きている事を知った時は安心したが、今はマヒロ達がまた敵兵に囲まれている状況が気になるからだ。

「何処を見ている！！ロスト中將！！！」

アルベルト大將の雄叫びで現実に意識が戻る。

鉄槌が迫る。

素早く大剣でうち払う。

重い。そして鋭く、正確な一撃だ。

死と隣り合わせの状況に舌うちをする。

その刹那、アルベルト大將が即死の一撃を放つ。

無理だ。避けられない。

大剣を盾にする。

全身に衝撃が走る。

気付くと足が地を離れ体を浮遊感を包む。

そのままカイル達を囲んでいる敵兵達の中まで吹き飛ばす。

カイル達は円陣を組み、目の前の敵を確実に倒していた。

その時だった。

一部の敵兵の包囲が崩れる。

崩れた所からロストが吹き飛んできて、カイル達のすぐ側に落ちてきた。

「ロスト！？大丈夫かい！？」

マヒロが驚きながら問い掛ける。

「げほっ…大丈夫だ！」

ロストはそう言うが、カイルはそうは思えなかった。

顔には無数の傷があり口からは血が出ている。

さらにロスト愛用の大剣は真ん中から真つ二つにへし折れていた。

だがロストは再び立ち上がる。

「ロスト…あんた魔法使わないのかい…？…まさかまだあんたあの事を…」

マヒロの言葉をロストは手で止める。

「アルベルト大将が来やがった！…！！！」

ロックが叫びながら敵を槍で突き刺す。

「マヒロ…俺は魔法で過ちを犯した…。だから…俺は魔法を自分で禁じたんだ。」

マヒロさんとロスト中將には何かしらの訳がありそうだ。

「アタシは気にしてないって散々言ったのに…  
それにロストアンタ…ボロボロじゃないか…」

マヒロがロストの頬を触りながら呟く。

「…わかったよ…使いますよ…使えばいいんだろ？」

ロストはぶつきらばうにそう言つと側に落ちていた敵兵の剣を拾う。

「ヤバいぜ姉さん!!!!!!!!!!  
アルベルト大將が来やがった!!!!!!!!!!」

「お前ら俺の後ろに居ろよ!!!!!!!!!!」

ロスト中將の体から炎が噴き出す。

「はあ!? ロスト中將魔法が使え無いんじゃないのかよ!?」  
ロックが状況を掴めないでカイルに問いかける。

「後で説明してやるから集中しろロック!!!」  
ロスト中將が言う。

「アタシらは周りの敵を殺るよ!!!! カイル!!!! アンタは魔導兵器を探しに行きな!!!!!!!!!!」

魔導兵器…。

戦いに集中しすぎて忘れていた。

「わかりました！！！」

カイルは建物の出入口目指し駆け出す。

視界の端ではガイル將軍が相変わらぬ勢いで敵を斬り飛ばしている。

その姿を見て気が緩んだ。

その瞬間だった。

アルベルト大將が目の前に現れる。

「若僧！！！！ここから先は通さん！！！！！！」

アルベルト大將が目の前に飛び出す。

「カイル！！！！止まるな！！！！出入口を目指せ！！！！！！」

ロストの声が響く。

カイルは速度を速める。

「若僧め！！！！そこまで死にたいか！！！！！！」

アルベルト大將が鉄槌を構える。

次の瞬間カイルの視界に稲妻が飛び込み、アルベルト大將に直撃する。

多分ロスト中將が放った魔法だろう。カイルはロスト中將に感謝しながらアルベルト大將の脇を素早く駆け抜け、出入口の扉を蹴り破り、建物の中に消えて行った。

## 第7話「魔導兵器」〈前編〉

「こざかしい真似を……！！！！！！」

アルベルト大將は稲妻を喰らったが一瞬しびれ、動けなくなったただけでたいしてダメージは無いようだ。

「アルベルト大將……行きます……！」

ロストを包む炎が激しくなる。

二人は睨み合い動きを止める。

まずアルベルト大將が仕掛ける。

鉄槌を思いきりロストめがけ振るう。

ロストは上半身を後ろに反らし紙一重で避ける。

そして持っている剣に炎を纏わせる。

そしてそのまま斬りつける。

「そんななまくらで我の鉄槌を破壊出来ると思うのか？」

アルベルト大將が鉄槌で攻撃を防ごうとする……が。

「ただ斬るんじゃない……」

焼き斬るんだよ……！！！！」

ロストの爆炎に包まれた剣はアルベルト大將の鉄槌の真ん中をみるみるうちに溶かし、そして……真一文字に焼き斬った。

そしてロストは逆の空いてる手を開く。

身体中の炎がその手に宿る。

ロストは堅く拳を握りしめる。

「ぐっ……！！！！」

アルベルト大將はその太い腕と厚い鎧で攻撃を防ぐ体勢にはいる。

だがロストが放った一撃はアルベルト大將のガードごと巨体を吹き飛ばした。

そのままアルベルト大將は兵舎の壁に激突する。  
兵舎の壁は煙と共に崩れた。

「げほっ……」

ロストは血を吐く。

無理をしすぎたか……。

多分肋骨が何本かいかれているだろう。左の拳の骨も多分駄目になった。

体も久々に使った魔法のせいかな格所がギシギシと痛む。

煙が薄くなってくる。

その時ロストは自らの目を疑う。

アルベルト大將は立っていた。

ニヤリと笑いながら。

「化け物か……！！」

ロストは思わず呟く。



アルベルトは歩きだす。

ロストは死を覚悟した。

だがアルベルト大将は

「ふははは…!!!」

楽しかったぞ…ロスト中将…！」

とロストに告げると

血を吐きその場に倒れた。

勝った。

ロストはアルベルト大将に近付く。

だが足下に無数の矢が刺さる。

「アルベルト大将が倒されるとは予想外でしたが…まあ良いでしょう。」

カトルだ。

ロスト達を裏切りはめた人物。

「今まで隠れていたのか…？」

臆病者め…！」

「なんとも言って下さいロスト中将…おっと今は反逆者のロストでしたっけ」

そう言うところアルベルト大将の巨体をカトルは担ぐ。

「ああ…今まで世話になったお礼に魔導兵器について少しだけ教え

てあげますよ。」

カトルは不気味に笑いながらロストに向けて言う。

「今この本拠地にある魔導兵器は失敗作なんですよ。」

「失敗作…？　どういう事だ…！？」

「解釈はお任せしますよ。」

まあ今回は魔導兵器は貴方達に預けますがいつかアルタイムが総力を挙げて取り返しに行きますよ…！」

そう言い残すとカトルはアルベルト大将を担いだまま闇に消え去った。

どういう事だ？

失敗作？

だが取り戻しにくるだと？

ロストは考え込んだが、

魔導兵器を見てみないとわからない。

ロストの視界の端ではまだ相変わらずガイル將軍が斧を振り回している。

ロストは痛む体に鞭打ちマヒロ達を助けに行く。

## 第8話『魔導兵器』後編

ロストがまだアルベルトと死闘をしていた頃。

カイルは目的地の建物の中にいた。

ロストやロック達の事を心配しながらも自分の役目を果たそうと建物の中を慎重に進む。

確か地下に魔導兵器があるとロスト中將が言っていた。

だが建物の中には以外に広く、なにより部屋が多い。そして誰もいない。多分避難したのだろう。

ただ中が明るいのは助かった。

魔法が使えれば簡単に火を出して周りを明るくできるのだが、カイルは魔法が使え無いので出来ない。

片っ端から部屋の中を探る。

途中で技術者が使用したと思われる部屋を見つけた。

机があり、設計図らしき物を見つける。

後で確認すれば良いとカイルは考え、重要そうな書類を片っ端から懐に突っ込む。

机の引き出しの中も確認する。

「これは…?」

引き出しの中にネックレスがあった。  
小さな緑色の綺麗な石が付いている。

カイルはそれを摘む。

「がつ…!!!」

突然酷い頭痛がカイルを襲う。

その場に倒れそうになったが気合いで踏みとどまる。

すぐに頭痛は無くなる。

一体なんだったのか?

カイルがネックレスを見つめる。

ふと見るとネックレスがあった引き出しの中に紙が一枚入っている。

「なんだこれ…?」

内容は

「実験台として用いた赤子が魔法を使い実験室から逃げ出した。

実験は成功だ。

赤子でも強力な魔法が使える様になった。

ネックレスだけでも赤子と離して保管していたのは不幸中の幸いだ  
った。

赤子の代わりは決まっている。  
実験は続行する。」

カイルはその紙を読むが訳が分からない。

時間が無いのでカイルはネックレスと紙を懷にしまい階段を探す。

その時カイルはとある事に気付く。

本棚の位置がおかしい。

カイルは閃く。

「なるほどな……」

カイルは本棚を横に押し、退ける。

目の前に階段が現れた。

生暖かい風を感じる。

階段を駆け降りる。

地下は何かの実験室になっている様だ。

しばらく進むと巨大な鉄の扉が現れる。

扉に近付く

その瞬間カイルは殺気を感じとる。

背後を振り向く。

技術者らしきメガネの男が鉄パイプを振り上げ襲いかかってきた。

だが相手は素人。  
動きが遅い。

カイルは鉄パイプを避け、男の後ろに素早く移動する。  
そして腰からナイフを取り出し男の首につきつける。

そして

「すいませんががこの扉を開けてくれませんか？  
鍵がかかっていて開かないんですよ」

カイルは淡々と男にナイフをつきつけながら語りかける。人を脅す  
時は静かに語りかけた方が効果がある。

「アンタはアルタイム軍の連中じゃないのか…？」

メガネの男がカイルに問いかける。

「違います。どっちかと言えばアルタイム軍を裏切った立場だけど  
ね」

とカイルは答える。

「…！！って事はアンタはガイル將軍の知り合いかい？  
なあ離してくれないか？」

メガネの男がガイル將軍と知り合いだとわかったカイルはナイフを  
しまう。

「突然襲いかかって悪かったな…」

メガネの男はこちらに振り向き頭を掻きながら詫びる。

「こちらこそすいませんでした…」カイルも謝る。

「ガイル將軍は大丈夫か？」

「ええ。今は外で敵兵と戦っていますが…」

「そうか…早い所魔導兵器の所に案内しようか。」

メガネの男が鍵をポケットから取り出し巨大な鉄の扉を開ける。

「貴方はいつたい…？」

「自己紹介がまだだったな…」

俺はダイソン「クレメント

只の技術者さ。」

ダイソンはカイルに手招きをしながら歩きだす。

「ロスト中將には俺が情報を横流したんだ。

ただ…兵器の位置しか教えてやれなかった。」

多分ガイル將軍の協力者なのだろう。

「君…名前は？」

「カイルです。カイル「ラフォーレと言います。」

しばらく進むと今度は木の扉が現れる。

ダイソンは鍵を開けようとする…が  
「くそっ……………！！！！」

鍵が開かない。

多分鍵が変更されたのだろう。

「ダイソンさん…下がって下さい。」

ダイソンが下がるのを確認するとカイルは勢いをつけてドアを蹴る。  
2・3回程蹴るとドアが壊れる。

そこを通り抜けると更に扉がある。

「カイル君…この先に兵器がある…  
ガイルもロスト中將も真実を知っている。」

「真実？」

カイルは嫌な予感がした。

「君の目で確かめてくれ…」

ダイソンが先に入る。

ダイソンの後にカイルが入った。

暗闇だ。

「今灯りをつけるよ。」



ダイソンの言葉と共に部屋が明るくなる。  
カイルは愕然とした。

「これが…魔導…兵器……………!?!」

なんて事だ…。

カイルは自らの目を疑う。

そこには……………

両手を鎖で壁に繋がれた、恐らくカイルと同じ年齢だと思われる…  
銀髪で髪が長い…ぼろ切れに身を包んだ少女が地面に座りうつ向いていた…。

「…そう…彼女が…【魔導兵器】…ルナ＝ウィッチだ……………」

ダイソンが呟く。

カイルは彼女に駆け寄る。

そして彼女を拘束している鎖を刀で切断する。

その後、彼女を抱き抱える。

「大丈夫か…!おい…!」

カイルは強く…そして優しく語りかける。

彼女の目は死んだ様に濁っていた。

「…貴方…は…だ…れ…?」

どうにかカイルは声を聞き取る。

か細い、弱々しい声だ。

カイルの胸が痛む。

彼女の体は傷だらけだったからだ。

「大丈夫だよ…俺はカイル…君を…ルナを助けに来たんだ…」

「…良かった…」

彼女は安心したのか目を閉じる。

カイルは一瞬焦るが、彼女は気が緩るみ気絶しただけだった。

カイルはそつと彼女を寝かせる。

そしてダイソンに

「これはどういう事なんですか…！！！！！」

と震えながら問いかける。

「…そのまんまだよ…」

アルタイム国では長くから人体に魔法物を埋め込み人間を魔導兵器にする計画が進んでいたんだよ…。

彼女での実験は成功したんだ。

それで軍上層部は彼女を魔導兵器として運用する案を出したんだ。

しかし上手くいったのは最初だけだった…。

彼女は魔法が使え無くなってしまったんだ。

それから彼女は失敗作として殺される予定だったんだ…。」

「…ダイソンさん貴方は…」

「罪の意識に耐えきれ無くてね…。古くからの友人だったガイルに相談したんだ…。そしたら…。ガイルが協力してくれたんだよ…。」

「ダイソンさん…。」

「さあカイル君…。早く脱出しなさい。

そして彼女を安全な所まで守ってやりなさい。」

「ダイソンさんはどうするんですか？」

「俺もガイル達に付いて行く。

アカツキ国にもアルタイムの事を説明しなきゃいけないしな」

ダイソンは力強く言う。

「なら早く一緒に逃げましょう…！」

カイルは寝ている彼女…。ルナを起こさない様にそつとおぶる。

彼女の寝顔は可憐だった。

ダイソンさんと一緒にきた道に戻る。

そして建物の外へとカイルとダイソンは飛び出す。

そこにはもう戦いが終わったのか、ロストが建物の出入口の所に座り込んでいた。

「ロスト中将…。ガイル將軍達は？」

カイルはルナを起こさない様にロスト中将に聞く。

「大丈夫だ…。皆ピンピンしているよ」

ロストは指差しながら答える。

指差す方向では、

マヒロとロックが馬をかき集めていた。ガイル將軍は少し離れた所で地図と睨み合っている。

するとロストがカイルにおぶられているルナとダイソンさんに気付く。

「ダイソンさん…！無事でしたか…良かった…。  
それに彼女が例の…」

ロストがダイソンに問いかける。

ダイソンは黙ったまま頷く。

「そうか…とにかくガイル將軍の所に行こうか…カイル、ダイソンさん着いてきてくれ。」

ロストは立ち上がりガイル將軍の所へ歩きだす。

カイルとダイソンはロストに着いて歩きだす。

ガイル將軍がこちらに気付いたのか歩み寄ってきた。

「おうカイル！ご苦労だったな…！！  
彼女が…そうなんだな？」

ガイル將軍が低く唸るように言う。

「ああ…ガイル…そうだ…。」

ダイソンさんが答える。

「ダイソン…！無事だったか…！」

ガイル將軍はダイソンさんの肩をバシバシ叩く。

「ガイル…早い所ここから退いた方が良い。  
アルタイム軍の追撃がくるぞ…！！」  
とダイソンが強く言う。

「確かにな…早い所ラスク砦に行きたいしのう…、  
よし…！！馬を持って来い…！！ここから退くぞ…！！」

ガイルはそう大声で怒鳴る。

ガイル將軍の部下が馬を牽いてやってくる。

カイルは馬の上に寝ているルナを先に乗せ、素早く自分も飛び乗り  
ルナが馬から落ちない様に体で包みこむ。そして馬を歩るかせる  
「ようカイル…！！お疲れ様だったな…！！」

ロックの声が響く

カイルが振り返るとロックがニヤニヤしながらこちらを見ている。

「うるせえロック!!!」

カイルはニヤニヤしているロックに水筒を投げつける。

「しかしねえ… オッサンから話は聞いたがまさかその女の子がねえ…」

ロックは飛んできた水筒を掴みカイルに投げ返す。

「ほらカイル！ロック！ボヤボヤして無いでさっさと行くよ!!!」

マヒロは馬を操っているロストの後ろで怒鳴る。

「耳元で怒鳴るなマヒロ!!!うるせえ!!!」

ロストがマヒロに怒鳴りつける。

カイルとロックの目の前でロストとマヒロの口論が始まった。

「あちゃー… 始まったよ…」

まあ良いや。

カイル!!! また後で色々話そうぜ!!!」

ロックはそう言つと馬を駆けさせる。

「カイル… まだカトルが裏切った事をロックに言っんじゃないぞ…」

いつのまにか隣にガイル將軍が馬に乗って現れる。

「今はまだ早い。」

ラスク砦に着いたら明かしてやれ。

それじゃワシは先に行って部下達を先導してくるかのう。」

その時だった。

ダイソンさんの顔がガイル將軍の巨体の後ろからヒョコツと現れる。

「カイル君…その娘を守ってあげてくれ…頼む。」

とダイソンが呟く。

「わかりましたダイソンさん…任せて下さい！」

ふとカイルは思い出す。

建物の中で集めた書類とネックレスを。

懷から書類とネックレスを取り出しダイソンに渡す。

「カイル君これは？」

「建物の部屋で見つけた書類とネックレスです。

ダイソンさんが持っていた方が良いと思ひまして…。」

「わかったよ。

書類は有り難く貰うよ。

あと…カイル君はこのネックレス触った時に何か感じたかい？」

「懐かしさと頭痛に襲われましたけど……それが何か…？」

ダイソンは一瞬考える表情をする。

「…ネックレスはカイル君が持っていてくれないか？」

「え……？でも……良いんですか？」

「多分このネックレスは君が持つてないと意味がないみたいだからね」

「わかりました……」

カイルはダイソンからネックレスを受取り懐にしまう。

「それじゃあねカイル君。  
また後でね。」

ガイルは馬の歩く速度をあげて先頭に立ち、軍勢を先導し始める。

軍は少なくなってしまった。

敵軍に殺られた。人数は四分の一位にまで。

傭兵団にいたってはほとんどが逃げてしまっている。

しかし……肌寒い夜だ。

カイルは着ているマントでルナを起こさない様にそーっと包む。

馬の手綱を握り直し、軍勢の後ろの方を馬に歩かせる。

「……あれ……？……私は……？」

か細い声が聞こえる。



起こしてしまった。

「起きちゃった？ごめんな…」

カイルはそうルナに言う。

「私は……一体……」

「助かったんだよ君は…  
安全だから安心して良いよ…。」

カイルは優しく語りかける。

「……助かったの？私……」

彼女の目から光る何かが流れる。

カイルは黙って彼女の頭をそつとなでる。

ルナはカイルに寄りかかる。

「大変だったな…君は…」

カイルは彼女の顔を覗きこみながら言う。

ルナの顔は疲れきった表情をしていたが目は輝いている。

「……カイル…さん？」

「カイルって呼んで良いよルナ。」

「…カイル…助けてくれてありがとう…」

ルナの肩が震えている。

彼女が今まで何をされてきたか考えるだけでカイルは胸が痛む。

「ルナ…君はいつからあそこに？」

「私…記憶が無いの…思い出せるのは暗い闇だけ…」

「…本当にごめん…」

「…カイルは謝らなくていいのよ…」

「本当に君は頑張ったんだね…」

カイルは強く優しく言う。

「…ねえ…カイル…私疲れちゃった…少し寝るね…」

ルナは目を閉じる。

「おやすみ…」

しばらくするとルナが寝息を立て始める。

カイルはため息を吐く。

アルタイム国は何を企んでいるのか？

魔導兵器の真実。

悲しい事実を背負うルナ。  
カトルの裏切り。

夜は明けていく。

## 第9話「アカツキ」

夜が明けた。

ルナは相変わらずグッスリ眠っている。

カイルは馬の足を速めさせ、先頭に居るガイル將軍とダイソンが乗る馬に近付く。

ガイルがそれに気付く。

「おう、カイルか。  
どうした？」

「將軍…後どれくらいで到着しますか…？」

「そうなの…後少しでアカツキ国の使者との合流地点に辿り着くかの…」

「そうですか…ありがとうございます」

カイルは一礼をしてガイル將軍の後ろの方に馬を移動させる。

「よう…カイル…おはようさん…」

声がした方向を見る。カイルは一瞬ひく。何故ならロックが本当に死にそうな顔をしているからだ。  
さらに目の下に大きなクマが出来ていていつも以上に不健康そうに

見える。

「お前…いつも以上にヤバそうだな…」

「当たり前だ…昨日は頑張ったからな…」

「そういえば本当はロスト中将、魔法が使えたんだよね？」

「ああ…理由は分からないけど…魔法を自ら使うの辞めてたらしいぜ…」

「へえ………」

「マヒロの姉さんと昔なんかあつて………それから使うの辞めたらしいよ………まあマヒロの姉さんは皆に、着いたら俺らに教えるって言ってたけどね………」

「皆にねえ………」

ロスト中将はマヒロさんと何かあるのは雰囲気からわかる。

「よう、カイル・ロック。昨日はお疲れ様だったな。」

そこにカイルとルナと同じようにマヒロを前に抱えたロストが横から話かけてきた。

「ロスト中将おはようございます」

「カイルもう俺は中将じゃない。ただの反逆者ロストだ。中将なんて堅苦しい呼び方よしてくれ。」

ロストは笑いながら言う。

「わかりましたロストさん。  
ところで…マヒロさん寝てるんですか？」

「ああ…こいついつの間にか寝やがった。」

マヒロさんは寝息を立ててグッスリ眠っている。

「俺も寝たい…誰か…」

ロツクが呟くが無視をしてロストが続ける。

「それにカイル…彼女の事だが…悪かったな…本当の事を教えなくてな…」

ロストがうつ向きながら言う。

「別に気にしてないですよ。  
しかしルナはこれからどうなるんですかね…？」

「それも皆に着いてから決めるだろうな…」

「そうですね…」

ルナとは他人の気がしない。  
それに、あのネックレスを見つけた時から何か…自分の体に違和感を感じていた。  
まあ、なるようになるだろう。

「ロスト！！カイル！！あとロック！！アカツキ国の使者が見えたぞ！！！」

ガイル將軍の声が響く。

「カイル、それにロックほらしっかりしろ。ガイル將軍の所に行くぞ。」

そしてカイル、ロスト、ロックはガイル將軍の側に近付く。

ガイル將軍は使者らしき男と話をしている。

少しすると將軍は大声で

「後少しでラスク砦だ！！！！！！！！  
お前ら後少しの辛抱だ！！！！！！」

と激励をする。

ガイル將軍の後ろにはダイソンさんが座っており無精髭を触っている。

使者らしき男は馬を走らせ軍勢を先導し始める。

しばらくすると目の前に砦が見え始める。

大きい。

アカツキ国の誇る巨大な砦ラスク。

「おいマヒ口起きろ！」

ラスクに着いたぞ！」

カイル！お前も彼女を起こしてやれ！」

ロストはマヒ口を揺すりながらカイルに言う。

気が進まないがカイルはそつとルナを揺すり起こす。

「あれ…？カイル…？ここは…？」

ルナは目を擦りながら周りを見回す。

「おはようルナ。」

ここはアカツキ国のラスク砦の近くだよ。」

「ラスク砦？」

「簡単に言うとアカツキ国が俺らを助けてくれるんだよ」

「カイル！！！！やつつと休めるぜ！！！！！！」

ロックが急に現れ、叫ぶ。

カイルは心の中で空気読めよな…と呟く。

まあロックらしいと言えばロックらしいが。

「…誰？」

「あいつはロックって言うんだ。  
俺の友達だよ。」



「友達…？」

「まあほとんど腐れ縁だけだな。」

ロックが笑いながら言う。

「うつせえロック…！！！」

その時だった。

前からロストの叫ぶ声が響く。

嫌な予感がする。ロックとカイルが急いで馬を向かわせるとそこには落馬したと思われるロストが倒れていた。横にはマヒロが寄り添い必死で謝っている。

「マヒロ姉さん…まさか…また寝惚けて…」

マヒロは寝起きが物凄く悪い。

昔ロックとカイルが起こしに行つてロックがボコボコにされた。

「わ…忘れてた…寝起きが悪い…って…事…」

倒れていたロストが呟く。

ロストは昨日アルベルト大将と死闘を繰り広げたせいで大怪我をしている。

多分マヒロが寝惚けて放った一撃が入ってしまったのだろう。

「大丈夫なの……？あの金髪の人…？」

流石にルナも心配そうにカイルに聞く。

「多分…大丈夫だよ…多分…」

しばらくするとロストは自ら立ち上がりマヒロの肩を借り、

また馬に乗る。

そして何事もなかったかのようにまた進み出す。

するとロストの後ろに座っているマヒロさんが話かけてきた。

「またやっちゃったよカイル…。

それに…ルナちゃんだっけ…？

アタシはマヒロってんだ。

こいつらの親代わりみたいなもんさ。

よろしくね。」

マヒロさんが笑いながらルナに握手を求める。

ルナは一瞬こちらを見る。

カイルが笑いながら頷くと、

ルナは恐る恐る握手した。

「ルナちゃん…困った事があつたらいつでも言いなさいよ…アタシはあなたの味方だからね！」

マヒロは優しく語りかけながらルナの頭をそっとなでる。

「…ありがとうございますマヒロさん…。」

ルナが軽く笑いながら頷く。

「ほら…着いたぞマヒロ…」

ロストが咳き込みながら言う。

かなりの痛みがある様だ。

巨大な門をくぐり、少し進みロストとロック達と同じ様に馬からルナを抱えて降りる。

ルナはカイルの腕を掴みながらピタリと着いて歩く。

「カイル…本当…ゆっくり休める…」

ロックが呟く。

今にも倒れて眠りそうな顔だ。

ガイル將軍とダイソンさんに近付く。

ガイル將軍は男と話をしている。

男は茶髪で、ショボくれた顔をしている。いや…多分眉毛が垂れて  
いるからそう見えるだけだろう。

するとロストが男に向かって

「久しぶりだな…ジン…」

「ロスト…お前…ボロボロ…」

男は苦笑しながら言う。

「うつせえ…訳があるんだよ訳が…」

ロストとシヨボくれた男…ジンは知り合いの様だ。

「まあとりあえずガイル將軍貴方達を客人としてラスク砦に迎え入れます。」

ようこそラスク砦へ！！！！！！」

そう言うときジンはクラッカーを取り出し鳴らす。  
茶目っ気たっぷりだ。

「…とりあえず部屋に案内しますか。」

ジンの後に着いて建物の中に入る。  
まるで城の様だ。

ロックは口をあぐり空けながら歩いている。

ロストはマヒロに肩を借りて足を引きずりながら歩いている。

ガイル將軍はダイソンさんとジンと何やら重要そうな話をしている。

カイルはルナと一緒に歩いている。

「緊張しなくてもここは安全だよルナ。」

「わかってるけど……」

ルナはカイルの服を強く掴む。

「それに… ロックもロストさんもマヒロさんも優しい人だよ」

「…マヒロさん…暖かった。  
カイルも…」

「ここが君達の部屋だよ」

ジンが大きなドアを開ける。

広い…カイル達7人のベッドが7個広々と並べられている。

奥には暖炉があり、居間もある。

「ああそうそう…浴場があるから食事の前に入って来ても良いよ。」

ジンが言う。

「うっひょーカイル!!!!入りに行こうぜ!!!!!!」

ロックが興奮して言う。

「もちろん男女別々だからね!」

ジンはニヤリと笑いながら言う。

結局、ロストは怪我の治療のため風呂には行かずに治療室にジンの  
お手伝いさんに連れて行かれた。

男湯にはカイル、ダイソンさん、ガイル將軍、ロック。

女湯にはマヒロさんとルナが入る事に決まった。

最初はルナはカイルから離れたくなさそうにしていたが、マヒロさんに着いていった。

風呂に入り終わり、食堂にまた集合する。

ロックは風呂で暴れ、ガイル將軍に殴られたたんこぶをさすっている。

ダイソンさんは体からでる湯気のせいかメガネが曇っている。

今カイルはいつも束ねている髪を束ねていない。

少し経つと女性陣も戻ってきた。

マヒロさんに連れられてきたルナは綺麗になっていた。

服は新しい物を着ていて顔色も良い。

ただまだ心はマヒロとカイルにしか開いていない。

その後少しするとジンとガイル將軍が現れる。

「湯かげんはどうだった？

とりあえず食事にしようか！」

食堂に案内されると

テーブルの上には大量の見たことも無いようなご馳走が並んでいた。

カイルはジンの隣に座る。

ルナはカイルの隣へ座る。

「ほら！皆ドンドン食べてくれよ！」

ジンが言う。

向かい側ではロックが手を休めずに食べ物をかきこんでいる。

ロックにとって味わうと言つ言葉は無いようだ。

ガイル將軍の側には皿が山積みだ。

マヒロさんは多分ロストさんの所に行っているのだろう。

姿が見えない。

ダイソンさんはさつきから

書類をじつと読んでいる。

隣ではルナが黙々と食べている。

こちらが見ているのに気付くと顔を赤らめてうつ向く。

別に気にしなくても良いのになと思いながらカイルは肉を一口食べる。

「カイル君？だよね」

ジンが話かけてきた。

「そうですよ、ジンさん。」

「君も若いのに大変だね……まあ若いうちから色々経験を積むのは良いことだよ。」

ジンはそう言う酒をぐいっと飲む。

「そう言えばジンさんはロストさんと知り合いなんですよね？」

カイルは問いかける。

「昔いくつかの戦で一緒になってね。ロストは昔アカツキ軍に居たんだよ。マヒロもね。」

「ロストさんですか？」

「そうなんだよ。今と同じ様にゴキブリみたいな黒い鎧を着てさあ……」

ジンは動きを止める。  
後ろから殺気を感じる。

カイルが恐る恐る振り向くと。

ロストがマヒロに付き添われて立っていた。  
手には松葉杖が握られている。

「ジン……お前……俺が怪我してなかったら……ボコボコにしていたよ……」

「ロスト……まあ落ち着けて。」

ロストはジンの隣に、マヒロはルナの隣へ座る。



「ルナちゃん美味しいかい？」

「…うん！」

ルナは笑いながら言う。

最初はあまり笑わなかったがマヒロやカイルの優しさに触れてからか、じょじょに明るくなってきている。

「それは良かった！！！」

急にジンがルナに言う。

ルナはカイルの影に隠れる。

「……………嫌われた……………か……………」

ジンは悲しげな表情のまま机に大袈裟に突っ伏す。

「そんな…事無いですよ…」

ルナはカイルの影からジンに言う。

「本当かい？良かった！」

ジンは顔を上げる。

「ジン！！！！あまり困らせるなよ。」

ロストは肉を取り皿に移しながら言う。

カイルの向かい側ではロックがデザートをまたかき込んでいる。  
奴の胃袋はブラックホールか？

だが上には上がいる。

隣のガイル將軍の横にはロックをしのぐ数の皿が積まれていた。

しばらく各々が夕食を楽しみ、食べ終わる。

そして部屋に戻る。

何故かジンも着いてきた。多分重要な話をするのだろう。

カイルは眠たそうに目を擦るルナをベットまで連れていき、ルナを寝かせる。

「ねえカイル…」

ルナが急にカイルに言う。

「私を…独りにしないでね…」

不安そうにルナは言う。

「大丈夫だよ。いつでも側に居るよ。」

カイルはルナを勇気付ける。

今の彼女は不安で押し潰されそうに違いない。

もしガイル將軍が助けるのが遅かったら…もし彼女の護送任務がガイル將軍以外の人物だったら…彼女は…ルナは今頃殺されていただろう。

さらに彼女がされた数々の実験により彼女の心はボロボロに違い  
ない。

「カイル…本当にありがとう…私ね、あの時…助けてくれた時カイ  
ルが眩しくて…温かく感じたの…。」

「俺が？」

「うん…眩しくて…優しい光に見えたの…ああ…まだまだカイル  
と話たいのに…眠いよ…」

ルナは目を擦る。

「俺は何処にも行かないよルナ。」

カイルはルナの頭に手を優しく載せる。

「わかった…カイル…おやすみ…」

「おやすみ…」

少し経つと寝息が聞こえ始める。

窓から空を見る。

今は夕方だ。

雲に赤い色が薄く掛りとても幻想的だ。

カイルはカーテンを閉め、ルナに布団をかけてから、居間に向かう。

居間には、ジン、ロック、ガイル、マヒロ、ロスト、ダイソン、がいた。

「やっと全員揃ったな。」

マヒロの横の床にあぐらで座るロストが言う。

「カイル…ルナは寝たか？」

ダイソンが神妙な顔付きで言う。

「ええ。さっき寝ましたよ。」

「よし…本題に入るか…」

ダイソンは全員に書類を配る。

「その書類はカイル君が持って来た物だが…まず内容を読んで欲しい」

ジンが全員に言う。

カイルは書類に目を通す。

カイルは言葉を失う。

書類の内容は魔導兵器…ルナについてだった…。

内容は数々の実験、について。

実験の内容は衝撃的な物ばかりだった。

カイルの胸が痛くなる。

さらに、ルナの体内には『宝玉』が埋め込まれていると記されていた。

「あー…すいませんが『宝玉』ってなんすか？」

ロックがおもむろに口を開く。

「『宝玉』ってのはな…簡単に言うと魔力の源…魔力の結晶みたいなものだ。ただ希少価値が高くアルタイムでさえ全く所有していないらしい」

ダイソンが宝玉について説明する。

「…つまりはアルタイムは宝玉を狙ってくる…」

つまり…

「これからルナを狙ってアルタイム軍が襲って来るって事ですか…」

カイルが呟く。

「その通りだカイル君。」

…そして…宝玉がアルタイムの手に渡ったら…」

「また新しい魔導兵器が造られるってことね…」

マヒロがロストの横で呟く。

「更には下手したら…一国が滅ぶ事になるのっ…」

ガイルが低く唸る様に呟く。

「めんどくせえ…ルナちゃんから宝玉取り出す方法は無いのかよ…？」

「まだ調べてる途中なんだ…だが必ず方法は見つける」

ダイソンは強く言う。

「しかし…難儀な問題だねえ…  
うーん…そうだ…！！！！！」

ジンは何かを閃く。

「この砦から2・3日したらアカツキ国に向かおう！！！！それが良い！！！！」

急に提案するジン。

これからどうなるのか…

## 第10話【魔法教室】

「はあ！？ジンお前急に何を……………」

ロストが言う

「いや…アカツキ国ならば…宝玉について詳しくわかるかも知れん。」

ガイルが顎を擦りながら呟く。

「……………！そうか！！確かアカツキ国は書物倉庫があつたよな……………！そこに宝玉についての資料があるかもな……………！それに研究施設だつてある……………！」

ダイソンが無精髭を触りながら言う。

「でもいいんすか？」

下手したらアカツキ国はアルタイム国を完全に敵に回す羽目に……………」

ロツクがぼそつと呟く。

「私を誰だと思っている？」

ジン「アカツキ、一応国王の一人息子なんだけどな。」

「馬鹿息子の間違いだろう？」

ロストが付け足す。

「……………えいつ。」

ジンはロストの脇腹を軽く蹴る。

「痛えええええ！！！！止めてくれ！！肋骨折れてんだ！！」

ロストは脇腹を押さえながら素早く立ち上がりマヒロの方へフラフラとよろける。

「あんた大丈夫かい？」

「大丈夫だけとさ……」

あの化け物アルベルト大将、大剣ごと俺の骨叩き折りやがって……」

「まあ生きてただけ良しとしなさいよ」

マヒロが呟く。

「ああ……そうだな……」

「そうだ！ところでカイル、お前魔法が使えないんだよね？この機会に魔法のプロに教えて貰いなよ。」

ロストがカイルに向かい言う。

「プロ？誰っすかそれ」

ロックが興味深そうに聞く。

「ダイソン！ほら、皆が呼んでるぞ！」



ガイルがニヤニヤしながら言う。

「昔の話を今更…」

ダイソンが頭を掻きながら呟く。

「ダイソンのオッサンただの技術者じゃねえのかよ！」

「こいつは昔、少将の座に就いていたんだ。

その時の異名は『魔鏡』って呼ばれてたのう。」

以外だ。

失礼だが、一目見ただけではただの頼り無さそうなオジサンだ。  
カイルはそう心の中で呟く。

「昔の話だ昔のな…。」

ところでカイル君、せっかくだし少し手解きしてやろうか？」

ダイソンが服の袖を捲りながら言う。

せっかくなのでカイルは教わる事にした。

「面白そうな事してるね！」

ジンも見に来た。

「でもダイソンのオッサン…こいつ魔法が本当にさっぱりなんだぜ  
…。」

ロックが呟く。

「…その時はカイル君に何属性の魔法を教えていたのかな？」

「あたしとロックで火属性の魔法を教えていたわよ。」

「あー…、それは多分カイル君と火属性の魔法の相性が悪いだけだな。」

ダイソンは懷からビー玉の様な物を取り出す。

「オッサンなにそれ？」

ロックはダイソンの掌の上のそれを摘み上げる。

するとみるみるうちに最初は、透明だった玉が紫色に変わる。

「それはな…『判別魔石』って言うんだ。

名前の通り触った人間と相性の良い属性の色に変わるんだ。

火なら赤、風なら緑、雷なら紫、水なら青、土なら茶って感じにね。

」

「って事は俺は雷属性が相性良いつて事？」

ロックが興奮しながら聞く。

「ああ、そうなるな。」

ダイソンはロックから判別魔石を受け取り、カイルに投げつける。

それを掴む。

そして掌の上に載せる。

すると判別魔石は緑色と青色が混ざり合った様な色になる。

「これは……？」

「おうカイル！！ワシやロスト、マヒロも同じ様に色が混ざったんじゃない！」

「うん。これは風、水、両方と相性が良いって事だよカイル君」

「ちなみに、ロストは赤と紫、マヒロは赤と青、ガイルさんは茶と紫、そして僕は赤と茶と紫だったよ。」

ジンが説明する。

ロックがショックでうなだれている。ロックだけが一つしか相性が良い属性しかない。

「よし、鉄は熱い内に打てだ。」

これからロック君、カイル君、二人に魔法を使える様になって貰う。

「

「どうやってですか？」

ダイソンとロストはニヤリと笑う。

「あんたらは早く魔法を覚えたいんだろ？」

なら手っ取り早い方法があるのよ。私もそれで魔法が使える様になったのよ！」

マヒロも笑いながら言う。

しかしその横でロストの表情が一瞬曇るが、すぐにいつもの表情に戻る。

「つまり…こういう事さ！……！！！」

ジンがロックの両肩を掴む。  
そして…次の瞬間！！

「へ…？……あぎゃあああああああ……！！！！！！！」

ロックの体に電撃が走り、骨が透けて見える。

カイルは腰を抜き、その場から動けない。

そしてジンが両肩から手を放す。

「ゲホッ…なるほど…こういう…事ね…」

と言いつつロックは煙を吐きながらそのまま側のソファに倒れ込んだ。

「い…一体…何を……？」

カイルが聞く。

「カイル…つまりはな、魔法を覚えるって事は体が魔法を覚えるって事になるのう。  
つまりは…」

カイルが言う。

つまりは…？



「カイル…大丈夫か？」

ロストが近付いてきて聞いてくる。

「ゲホッ……ど…どうにか、大丈夫です…。」

「よく耐えたね、カイル君。

容赦なくやったたつもりなんだけどね。」

ダイソンが笑いながら言う。

ダイソンさんは絶対ドSだ。

「あれ？カイルあんた右目が……。」

マヒロが驚きながら言う。

「右目？」

ジンが鏡を差し出す。

おかしい確かに。

カイルの両目の瞳は本来は黒いはずだ。

しかし…いつもとは違っていた。

右目の瞳の色が、違う。

髪と同じ様な色、緑色になっていた。

「なんでだ？今までに何回もこの方法をやって来たけど初めての経験だ…」

ダイソンがまじまじとカイルの顔を見る。

「別に全然気にならないですよ。これくらい。」

別に瞳の色が変わったが、はっきり見えるし問題ない。

「本人がこう言ってるんだから、問題は無いみたいだね。よし…次のステップに行こうか！」

ダイソンがそう言う。

これからどうなるのか…

## 第11話【ファクトリー】

「次は何をすれば良いんですか？」

「後は自分で考え、自分で工夫してやるんだ。以上！」

ダイソンが言う。投げやり過ぎる。  
理不尽だ。

「自分で考えないといざと言うとき、困るからのう。」

ガイルが付け足す。

「って事で今日は解散だ！」

最後にジンが言う。

ロックがソファから立ち上がり、フラフラとベッドに向かう。

流石に心配なので横について歩く。

「大丈夫かよ、お前。」

「…駄目…死にそう…」

不健康とか通り越して今にも死にそうだ。

そして寝室に入るとロックは、自分のベッドに倒れ込み、死んだように眠り始めた。



ルナは相変わらず深い眠りに落ちている。

カイルは居間へ戻る。

「ロックはどうした？」

ガイル將軍が聞いてくる。

「死んだように眠ってますよ」

「まあしょうがないか…」

「あー…そうそうカイル君、最後に魔法についてアドバイス。イメージが大切だからねイメージが。」

ダイソンがそう言った時だった。

扉が勢いよく開く。

そこには、軍服姿の女性がいた。年齢はマヒロと同じ位だろうか？橙色の髪を後ろで束ねている。

「ジン大将……！敵軍です……！」

彼女が言う。

「ルミネ少将か…ああ紹介するよ！

彼女はルミネⅡラトリウム少将。

こここの守備隊長だ。

…それで敵の軍勢は？」

ジンの表情が真剣になる。

「数は不明ですが…ファクトリーの軍勢です！」

軍勢を率いるは…『鮮血の獅子』ラッシュ＝ガイダンス中將です！  
！」

『鮮血の獅子』ラッシュ＝ガイダンス。  
残虐な性格で有名な軍人。

村人を皆殺しにし、略奪をする。

その悪名は名高い。

「目的は…彼女だろう…。」

ダイソンが苦々しく言う。

ルナだ。

きっとルナを狙って来たのだろう。

「しかしなんでアルタイムじゃなくてファクトリーなんだ？」

ロストが首を傾げる。

「多分アルタイムはファクトリーに情報をわざと流したのだろう。  
こちらの小手調べって所かのう…。」

ガイルはそう言うのと鎧を着る。

「ちょっと待ったガイルさん！」

貴方達はこの砦に客人として来てもらったんだから、戦いは私達ア

カツキ軍に任せて下さいよ。」

ジンが慌てて言う。

「そんな訳にはいかん。

ワシらが問題を持ち込んだ以上、ただ見ている訳にはいかんのう。」

ガイルはそう言うのと今度は斧を担ぐ。

ロストも準備をしようとする…が

「わかりましたよ…ガイル將軍…  
ただしロストお前は今回は駄目だ！」

「うるせえジン！！なんでだよ！！！」

「あたしもロストが戦いに行くのは反対だね。」

マヒロが言う。

「大怪我してる今のお前じゃ足手まといだ。」

ジンが強く言う。

確かにとカイルは感じる。今ロストはアルベルト大将との戦いの傷跡が酷い。

肋骨は折れ、左拳に至っては魔法の反動で火傷している。

さらにロスト愛用の特注の大剣はアルベルト大将の一撃で折れている。

「ロストさん…自分も反対です。」

カイルも反対する。

「ぐっ……！わかったわかったよ！！今回は辞める！！  
ただし、俺は皆から指示をジンと一緒に出す。これだけは譲らねえぞ！」

「頑固な奴だな…よし…とりあえず全門を閉めてくれ。」

僕は正門の上に行く。カイルとガイル將軍とロストは僕に着いて来てくれ。

ロックは……まあ今回は無理だろう。マヒロはロストの側を離れないようにしてくれよ。」

ジンは的確に指示をする。

「でも…ルナが…」

この皆に侵入して直接ルナを狙ってくる可能性も低くない。

「私がここに残ろう。」

ダイソンが眼鏡を不敵に光らせながら口を開く。

カイルはダイソンの魔法の一撃を受けたからわかる。

この眼鏡のオッサンもといダイソンはかなり強い。

ダイソンなら確実にルナを…あとついでにロックも守りきってくれるだろう。

「よし！決まりだ。ルミネ君、弓部隊を砦の上に配置してくれ。砲台の準備もだ！あと僕の弓を用意してくれ！」

ジンはあたふたと鎧を着込みながらルミネに言う。

「すでにジン大将の弓は用意済みです。配置も準備も全て終わっています。」

ルミネが外に居ると思われる兵を呼ぶ。

大きい。カトルが使っていた弓より巨大だ。よく見ると弓の弦が鉄で出来ている。

さらに、格所に機械の仕掛けが着いており、力を増幅させる仕組みだろう。

「……………ありがとうルミネ君！」

ジンは一瞬呆気にとられるが、すぐに切り替える。

カイルも素早く鎧を着込み、腰に刀を携える。

「よし、行くかのう。」

ガイルが言う。

ジンはルミネを連れ、部屋をでる。

カイルもついて行く。

これから、防衛戦が始まる…

## 第12話【防衛戦】

月明かりが明るい。今砦の外壁の上にカイルは立っている。

「……ちょっとこれは多過ぎない？」

ジンの表情がひきつる。

ファクトリーの軍勢は灯りをともしながら大軍で攻めにきている。

広い砦の正門の正面に火の明かりが大軍となり進軍してきている。

「先程の最新の情報ですと数は三万との事です。」

「多いな……ん？」

ロストが何かに気付く。

大体1kmほど離れた所にファクトリーは陣を作り始めた。

そして火が一つ、砦に近付いてくる。

そして正門の目の前でその騎馬は止まる。そして大声で、

「ラッシュ中将の伝言だ!!!!!!」

『魔導兵器をこちらに引き渡せ。

渡さなければ、武力で奪っていくぞ。』との事だ!!!!!!

アカツキ軍大将ジン「アカツキ殿!!!!!!返答はいかに??」

とラッシュ中将からの伝言を伝えてきた。

「決まっているだろう!!!」

『断る!』と伝えてくれ!!!!!!」

ジンも負けじと怒鳴る。

「ジン!!アカツキ殿!!!!了解した!!!!後悔なさるなよ!!!!!!」

と言いついて陣に駆け付けた。

「さあて…ワシはいくぞ。」

ガイル将軍が下へ降りていく。

そして砦の正門が音を立てて開く。

アカツキ軍が砦から200m離れた所で陣を作り始める。

カイルは念のために砦に残れとガイルに命令された。

陣の前衛にはガイルとガイル直属の軍がいる。

「よし…一番、二番、三番、四番砲台、準備を!!!!!!」

ロストが叫ぶ。

慌ただしくなる。

すると、いつのまにか鎧に着替えたルミネ少将が、

「カイル君？よろしく願いしますね。」

と声をかけてきた。

「こちらこそ、よろしくお願いしますルミネ少将。」

カイルも挨拶をする。

「来たぞ！！！！！！」

ロストが呟く。

ファクトリーが動き始める。

三段に構えたファクトリーの第一陣、先鋒が突っ込んでくる。

ジンは弓を構える。

ルミネも弓を掴み構えた。

「…一番、二番、三番、四番砲台…撃てーっ！！！！！！」

ロストが叫ぶ。

轟音と共に砲台から砲弾が撃ち出される。

砲弾が敵軍の先鋒に直撃する…が先鋒の数が少し減っただけで動きを乱さずに突っ込んできた。

「矢を放て！！！！！！」



ジンの合図と共に味方の弓部隊が砦の上から、敵の先鋒に矢を射始める。

次々と敵は矢に射たれ倒れていく。  
だがやはり最初よりも敵先鋒の数は減ったが、勢いは減らない。

「しょうがない…アレを使うか…」

ジンはそう呟くと右手で矢を持ち、弓を引き絞る。

するとジンの右手から炎が溢れ出し、矢に集まりだす。

そしてジンは炎が宿った矢を放つ。

矢は風を斬るようにして先鋒に当たる。

その瞬間、炎を纏った矢が小爆発を起こす。

少し、先鋒の動きが乱れた。

ガイル將軍はその隙を見逃さなかった。

ガイル將軍を先頭に、直属の軍が一行になり敵先鋒軍に突っ込む。

そして深く敵先鋒軍に突き刺さる。その後すぐに味方軍の両翼が敵に突っ込み、敵を散らす。あっという間に敵の先鋒軍は敗走して本陣へ撤退を開始した。

「凄い…！」

カイルは啞然とするばかりであった。今までいつも戦場に居たので全体の動きを見れる筈もなく、初めて見る光景に驚くばかりだった。

「臭いな…どうにもおかしい…」

隣にいたロストが呟く。

「どうしたんですか？」

「いや…敵の動きがおかしいんだ…」

「確かにおかしいわねえ…」

マヒロも言う。

「……………」

カイルは首を傾げる。

「なあカイル…もしお前がラッシュ中将だったらどう攻める？」

「……………数で勝っているのとおりあえず全軍で攻めますね。」

カイルは気付く。

カイルの顔を見てマヒロは言う。

「それが当たり前で勝率の高い戦法なんだけどね…今のファクトリ  
ーはどうだい？」

…確かに不自然だ。

まるでガイル將軍を誘っているような陣だ。  
先鋒軍にしても撤退が早すぎる。

「…嫌な予感しかないな…」

ロストが、追撃を開始したガイル將軍の軍を双眼鏡を使い覗きながら呟く。

ガイル將軍の軍は、二万弱。

ラッシュ中將の軍は少し減り、二万強。

互角まではいかないが、良い勝負になる。

ガイル將軍もその事を踏まえた上で追撃を開始したのだろう。

そしてラッシュ中將の軍本陣も少しずつ後退し始める。

その時だった…！

カイル達がいる正門の反対側で歓声が響きだす。

「……………！！！！ジン！！！」

ロストはジンに叫ぶ。

「わかっているよ！！！！」

ルミネ君！余った部隊を反対側の門に向かわせろ！！！！

伝令！！！！今すぐガイル將軍を呼び戻せ！！！！カイル君、ロスト、

マヒロ！先に反対側の門に行ってくれ！！僕もすぐに行く！！」

ジンは素早く的確に指示をする。

カイルは駆け出す。

反対側の門に。

ロストとマヒロも後ろから駆けてきている。

その更に後ろには兵をかき集め、その兵を率いてルミネが駆けている。

「くそっ…多分カイル將軍が追撃している本陣は偽物だ。あそこにラッシュはいない…。」

つまり…。

「あの野郎まんまと俺らを罠にはめやがった！！！！！」

カイル達が駆け付けた時には既に遅かった。

裏門は破られ、敵の伏兵が雪崩れ込んでいた。

その中に一際目を引く真っ赤な鎧と兜を着けた人物がいる。

「悪趣味な鎧だねえ…悪名どうりか…ラッシュ中将…」

マヒロが呟く。

これからカイルの戦いが始まる…

### 第13話【過去】

カイルは刀を構え、声を上げながらこちらに来る敵兵を斬る。

視界の端ではルミネ少将が体に似合わない大きい鉄槌を振り回している。

ロストはマヒロの側で敵兵から奪った剣で次々と敵兵を斬り捨てていく。

マヒロはロストの側を離れず、援護をしている。

だが敵の伏兵の方が圧倒的に数が多い。

こちらは兵をかき集めて、大体二千位。

相手は八千は下らないだろう。

「不利過ぎるだろ……」

カイルは呟く。

その時、赤い鎧を着たラッシュ中將が剣を片手に突っ込んでくる。

「我が名はラッシュ・ガイダンス！魔導兵器を頂きにきた！！」

「あんたの相手はあたしがしてやるよ！！！！」

流石に今のロストでは中將を相手にするのは無謀と考えたマヒロが  
ラッシュ中將の前に立ち塞がる。

「マヒロ……無理すんな……！」

ロストがマヒロに言う。

「女が相手とは……！」

我も舐められたものだ……！！！！！！」

ラッシュ中將の剣が唸りを上げながらマヒロに襲いかかる。

「女だからってなめるんじゃないよ……！」

マヒロはレイピアを上手く扱い、ラッシュ中將の一撃を受け流す。

そしてすぐに突きを放つ。

だがラッシュ中將はそれを軽く打ち払う。

マヒロはラッシュ中將相手に避けながら戦いを展開する。

カイルも目の前に迫ってくる敵の攻撃を避け、蹴りを喰らわす。

その時だった……。

マヒロとラッシュ中將の戦いに敵兵士が割り込み、マヒロの後ろからマヒロを斬りつけたのだ。

マヒロの背中から血が噴き出す。

「くっ……………！！！」

マヒロがその場にうずくまる。  
まずい。

カイルのいる位置から全力で駆けても間に合わない。

「馬鹿め……！戦場は常に一対一だと思うなよ女……！！  
死ねえええ……！！！」

視界の端ではロストが必死の形相で走って来ている。  
間に合わない。

その時カイルはダイソンの言葉を思い出す。  
「魔法はイメージだイメージ」

カイルは刀を地面に突き刺す。  
カイルを中心にして大気が渦を巻き始めた。

地面に刺した刀を引き抜き、  
ラッシュ中将に向けて一振りする。

刀の先端から竜巻が放たれた。  
地面をえぐりながら、敵兵を吹き飛ばしながら、ラッシュ中将目が  
けて突っ込んでいく。

「何だと！？」

ラッシュ中将は思いきり横に転がり、カイルが放った竜巻を回避し  
た。

ラッシュ中将が居た場所は竜巻にえぐりとられて、大きな窪みが出て  
来ている。

「よくやった…カイル…!!」

ロストがそう呟やき、カイルの隣を駆けていく。

カイルもロストの後を追いつける。

ロストがマヒロに駆け寄り、抱き上げる。

「おい!!マヒロ!!大丈夫か!？」

…くそっ…ルミネ少将!!来てくれ!!」

マヒロは力無くロストにしがみついている。

ルミネ少将が兵を率いて走って来た。

「カイル、ルミネ少将…マヒロを頼む…!!」

ロストはカイルにマヒロを任せると立ち上がる。

ロストの体が炎を纏いだす。

だが、なにかが違う。

アルベルト大将の時は真紅の炎だったが、今の炎はドス黒い炎だ。  
本当に…『漆黒の死神』の名の通りだ。

ラッシュ中将がまた現れる。

「ちっ……殺り損ねたか……」。

だがロスト中将!お前を殺ればそれなりの褒美が貰えそうだな!!



「!!」

ラッシュ中將は剣を地面に突き刺す。  
剣を中心に地面にヒビが入る。

ヒビから水が噴き出す。

水は龍の形を作り、その龍はロストに襲いかかる。

「火は水で消える!!! って事で死んでもらおうか!!!」

ラッシュ中將が高らかに笑う。

「馬鹿だろ? お前。」

火が水を消す事も出来るんだよ!」

ロストが駆け出し、正面から水龍とぶつかった。

その途端、音と共に辺りに霧が現れる。

そして霧が晴れる。

そこには… 血まみれの剣を持ったロストと、体に大きな切傷がついて倒れて息絶えたラッシュ中將がいた。

「蒸発だよ馬鹿。」

ロストはそう呟くと剣を投げ捨てた。そして体からドス黒い炎が消える。その時だった。

「ジン!! アカツキ参上!!!」

さあさあ敵將はロスト中將が討ち取った!!!

後は残党を排除するんだ！！！」

ジンは移動式砲台の上で叫ぶ。

多分その砲台の準備で遅くなったのだろう。

砲台が火を吹く。

砲弾が敵の残党に炸裂する。

ジンは反動で砲台の上から落ちた。

ロストはそれを普通に無視をして、カイル達の所に駆け寄る。

「マヒロは！？」

マヒロの背中への傷はそこまで深くないが、大怪我の部類にはいるだろう。

それに：カイルは見てしまった。

マヒロの応急処置をするとき、背中に酷い火傷の跡があるのを…。

「とりあえず、応急処置はしましたが…しばらくは絶対安静でしよう。」

と医療班の兵が言い残し、一礼して次の怪我人の所へ走り去っていった。

今の戦況はほとんどアカツキが勝っている。

ジンが持ってきたあの砲台と、ラッシュ中將の死という知らせで、ファクトリーは戦意を喪失してしまってもう敗走している。

「とりあえず、アカツキの勝利って事が…」

カイルは呟く。

ガイル將軍も追撃から戻ってきた。

向こうの本隊も敗走し始めたらしい。

マヒロの治療が終わるのを待ち、カイルはロストと一緒に部屋の寝室へマヒロを運び込む。

ロストはマヒロをベッドに寝かせた。

まだマヒロは意識を失ったままだ。ルナとロックはぐっすり寝ている。

ガイルはダイソンと共にジンの部屋に行き、ジンと話している。ルミネ少将は被害を調査している。

「ロストさん…マヒロさんの背中の中火傷の跡は……………」

聞いてはいけないような気がしたが、決心をして聞いてみた。

「ああ…見たのかお前……………」

あの跡はな…俺やマヒロがまだアカツキに居た時に……………俺が……………マヒロにつけたんだ……………」

「ロストさんが？」

「ああ…………とある戦の時に、俺の炎の魔法が暴走したんだ……………」

敵と味方両方巻き込んだ大惨事になったよ…。

その時、マヒロも巻き込んだよ…。

…俺はそれから魔法を使うのを辞めて、軍を抜けたんだよ…。  
そしたら、ガイル將軍と出会ったんだよ…。

あの人に惚れ込んでな…それからアルタイムに入軍したんだよ。  
それから今は今に至るってわけだ。」

ロストはマヒロの髪を撫でながら言う。

2人に何かあると感じていたが、まさかそんな事があったとは。

「なあカイル…お前に気を付けて貰いたい事がある。」

ロストが真剣な表情で言う。

「なんですか？ロストさん」

「魔法つてのはな、使う人間の感情によって色々左右されるんだ。  
魔法を使う時には冷静になれよ。」

今日みたいにな。」

ロストはカイルの肩をぽんと叩く。

「はい！わかりました！！」

「しかし…お前初めての魔法が竜巻だとはな…驚いたよ。」

「そうですか？」

内心照れているが表情に出さないようにする。

「俺なんて最初の魔法は火花だったんだぜ。」

ロストは指を鳴らす。  
すると火花が散る。

「でも魔法って難しいですね。」

「まあな。下手したら暴走するからな。」

「ええ……自分ちよつと居間で休みます。」

ここは空気を読み、マヒロとロストを二人っきりにしよう。

「……あー……わかった。」

俺はしばらくここにいるよ。」

ロストは頭を掻きながら言う。

ルナは安らかな顔で寝ている。

ロックは腹立つ位の笑顔で爆睡している。

ひっぱたいてやろうかと思うが、とりあえず居間に行く。

そしてベランダから外を眺める。

綺麗な三日月だ。

まだ時間は八時を回った位だろう。

右目の古傷が痛む。

この古傷は、カイルが傭兵団に拾われた時からついていたらしい。  
と言ってもまだ本当に小さかった頃だからまったく覚えていない。

「ガハハハ！カイル、どうした！？」

聞き慣れたあの声。

ガイル将軍がカイルの横にやってきた。

「将軍…確か将軍と初めて会ったのはいつごろでしたっけ？」

「急にどうした？…」

まあいい。確か……お前が7・8歳の時だったかのう？

あ那时的お前、目が死んでいたのう。」

ガイルが笑いながら言う。

「はははは…」

…将軍が俺の世界を変えてくれたんでしたよね…」

当時の事は覚えている。

世話になっていた傭兵団が全滅して、親同然の傭兵達が皆死んだ。

その傭兵達が死ぬ前に、必死になってカイルを戦場から逃がしてくれた。

その後、生きる希望を失った幼いカイルは広い草原を独りさま迷っていた。

その時に遊撃の任務に就いていたガイル將軍が拾ってくれたのだった。

ちなみにその当時からマヒロの傭兵団はガイル將軍に雇われている。

「ガハハハ！まだ小さな餓鬼が草原を独り歩いていたんだからな！流石に驚いたのう。」

ガイルはまた高らかに笑う。

ガイル將軍は最早カイルからすれば父親同然だ。

ガイル將軍がどう思っているかわからないが、少なくとも自分はそう思っている。

「ところでカイル…お前は寝ないのか？ワシはそろそろ寝ようと思っ  
ているがのう。」

「自分はもう少しここに居ます。  
將軍、おやすみなさい。」

「そうか。  
…じゃあおやすみだのう、カイル。」

ガイル將軍はそう言い残し、どすどすと寢室へ歩いていった。

まだ肌寒い。

カイルは左拳を開く。

掌に水を集めるイメージをする。  
すると、もやが集まり始める。

そして水の球が掌の上に出来る。

それを軽く握り潰す。

水は空気中に四散した。

少し魔法に慣れてきた。

さて、まだ眠くはない。

これから何をしようか…

夜はまだ始まったばかりだ…。



## 第14話【休息】

とにかく暇だ。

とりあえず、居間に戻る。

「おはようさんカイル！！！」

ソファーにはロックが座っていた。  
多分目が覚めたのだろう。

「お前…今頃起きるなよ…」

どうしようか。

ロックにカトルの裏切りの件を言わなければならない。

「よし、カイル！風呂行こうぜ風呂！！！」

急にロックが提案した。

チャンスだ。

風呂なら裏切りの件を伝えられるチャンス。

「よし、行くか。」

すぐに準備をして風呂へ向かう。

ロックの顔はジンから受けた電撃のせい少し黒く汚れている。

「お前顔汚ねえな…。」

カイルは呟く。

「だから風呂行こうぜって言ったんだよ。」

なんだかんだ二人でつつき合いをしているとすぐに風呂に着く。

服を脱いで風呂場にロックが突っ込む。

本当に元気な奴だ。

とりあえずカイルも服を脱いで風呂場に入る。

もう既にロックは浴槽の中に入っていた。

何度見ても広い風呂場だ。

浴槽も馬鹿みたいに広い。

とりあえずカイルも浴槽に入る。

裏切りの件を言うならいましかない。ロックはかなりショックを受けるに違いない。

「なあ…ロック…カトルさんの事なんだけどさ…」

「あ？ああ、あの糞野郎裏切ったんだろ？」

「……へ！？なんでお前それを……。」

予想外だ。

原因は知らないがロックは裏切りの件を知っていた。

「あの作戦が失敗する原因なんて、裏切りしか考えられないからな。ガイル將軍、ロスト中将、マヒ口姉さん、カイルお前も裏切る筈が無いからな。」

つまり、裏切ったのはあの糞野郎だって思ったのさ。」

忘れていた。

昔からロックは勘や考えが鋭い。

「なんだよ、知っていたのかよ。」

「バーロー、俺を舐めるなよ!」

ロックはそう言うつと浴槽から出て、風呂場から出ていこうとする…が。

「ぎゃああああああ!!!」

ロックの切ない悲鳴が響く。落ちていた石鹸を踏み、滑って派手に転んだのだ。

「……………本当…情けない奴だな……………」

ロックの近くに行き、軽く蹴る。

すぐにロックは飛び起きる。

頭を打ったようだ。

後頭部の辺りをさすっている。

「痛ててて……」

「ほら、部屋に戻るぞ。」

カイルとロックは服を着て、部屋に向かう。  
部屋に着いた。

居間にはダイソンさんとジンさんがいた。

「やあカイル君ロック君。」

ダイソンが眼鏡をいじりながら言う。

「風呂帰りかい？」

ジンが煙草をくわえながら聞く。

「そうつすよジンさん。」

ロックがさつき打った後頭部をさすりながら言う。

「…ジンさんこれからどうするんですか？」

カイルが聞く。

「うーん…とりあえず、アカツキ国を目指すんだけどね…」。

ジンは地図を机の上に広げる。

「今私達がいる場所はここだ。」

ダイソンがラスク砦と書かれた部分を指差す。

「次に、アカツキ国はここ。」

ジンがアカツキ城と書かれた位置を指差す。

「これは…海路を通るんですか？」

ラスク砦からは海を渡って行った方が地図上では距離が短い。

「そうだよ。」

とりあえずここから港町マイロタウンに向かうよ。  
ただね…。」

「ただ？なんだよジンさん。」

ロックが聞く。

「実は僕船酔いが酷いんだ。」

「馬鹿かお前は…。」

ロストがいつの間にかカイルの隣にいた。

「あれ？ロスト、マヒロはもう大丈夫なのかい？」

ジンが聞く。

「マヒロならさつき意識が戻ってな。少し話したらすぐに寝たよ。」

ロストはそう言つと居間の棚から酒のボトルを取る。

「まあ本当に海路は問題があるんだよ…。」

ダイソンが煙草をくわえ、魔法で火をつけながら呟く。

「問題つてなんだよオッサン。」

ロックが聞く。

「海賊が現れるらしいんだよ。」

ジンが今度は真面目に言った。

「海賊…ですか？」

今の時代じゃ海賊も沢山いる。

カイルも幾度か海賊達と戦った事もあった。

「それに今回は軍を引き連れてじゃなくて、僕、ガイルさん、ダイソンさん、ロスト、マヒロ、ロック、カイル、ルナちゃん、のメンバーで行くからね。」

つまり、敵の目を引かないように軍を連れずに静かにアカツキを指すって事らしい。

「もし海賊と一戦交える事になったら厄介ですね…。」

「それに僕の船酔いもね。」

ジンが言った。

「本当お前海に沈めてやろうか？」

「うるさいな『漆黒のゴキブリ』め。」

「黙れよ馬鹿息子。」

カイルの視界の端でロストとジンが取っ組み合いの喧嘩を開始した。

「まあとりあえず、出発は明日の朝だな。」

ここに居ると他の軍が襲って来るかもしれないしな。」

ダイソンは喧嘩している二人を無視して話を進める。

「ルミネ少将はどうするんですか？」

「彼女はこの砦の守備隊長だ。」

流石に同行願うのは無理だろう。」

ダイソンは答える。

「ルミネ少将って誰？ねえ誰？」

ロックが聞いてくる。

しつこいので、今まであった事を全て伝えた。  
戦の事等を。

「…俺が寝てる間にそんな大変な事が…」

ロックが呟く。

「とりあえず、明日に備えて休みなさい。  
私はもう休ませてもらうよ。」

ダイソンは煙草の火を消して、寝室に入ってしまった。

相変わらずロストとジンは取っ組み合った状態だ。

「お先に俺は寝るよ…。」

ロックはそう言い残し、寝室に戻る。

すると突然、居間の扉が開く。

そこにはルミネ少将が軍服姿で立っていた。  
まだロストとジンは取っ組み合っている。

「ジン大将。」

頼まれていた人材についてですが……………」

「やっと見付かったか！」

いつの間にかロストとジンは取っ組み合いを止めていた。

「はい。」

確か諜報能力が優れている人物を探してきてくれとの命令でしたよ



ね？

適任が見付かりました。  
入ってきて良いわよ！！！！」

ルミネは外の誰かを呼ぶ。

「失礼します。」

扉を開いて一人の人物が入ってきた。

女性だ。八重歯が目立つ。

髪は薄い桜色をしている。

その髪をルミネ少将と同じ様に後ろで束ねている。年齢は多分ロス  
トより少し若いだろう。

「私はサラ＝ラピッド少尉と申します。

ジン大将よろしく願いします。」

彼女は…サラは堅苦しく挨拶した。

「そんな堅苦しくなくても良いんだけど……まあ良いや。

こっちの金髪はロスト中将だ。

そっちの緑髪の彼はカイルだ。」

ロストと一緒にサラに挨拶をする。

「ロスト中将とカイル……少尉？」

サラが首を傾げる。

「自分はただの傭兵ですよサラさん。」

カイルやロック、マヒロには官位はない。立場上雇われた傭兵だからだ。

「そうなんだ…とにかくよろしくお願いしますね。」

「さあさあ、ルミネ少将もサラ少尉も早く休みなさい。明日は早いぞー。」

ジンが言う。

「わかりましたジン大将。それでは失礼します。」

ルミネ少将がサラを連れて部屋を出ていった。

「さてと、俺も寝るよ。」

ロストも寝室へ向かう。

そろそろ流石に眠くなってきた。

「ジンさん…そろそろ自分も寝ます。」

「わかったよカイル君。」

カイルは寝室に入る。

ルナは気持よさそうに寝ている。

ガイル將軍はイビキがうるさい。

とにかく、寝よう。

髪を束ねている髪飾りを外す。

この髪飾りは自分が拾われた時から持っていたらしい。

ベッドに潜り込み、目を閉じる。

そのまま深い眠りについた…。

## 第15話【目指すはアカツキ】

…誰よりも早く起床してしまった…。

窓から外を見る。

まだちよつと暗い。

夜明け前だろう。

「……あちゃー…早起きしすぎた…。」

などと独り言を言ってみる。

しかし……ロックとガイル將軍のイビキが本当につるさい。

よくこの爆音の中で寝れたものだ。

毛布を持って居間へ行く。

とりあえず皆が起きるまで時間を潰すために、なんとなくだがベランダに出る。

ベランダからは砦を一望出来る。

裏門の辺りには馬車が用意されている。

多分あれで次の目的地、マイロタウンに向かうのだろう。

マイロタウンはラスク砦から大体2・3時間で着くらしい。

ただ、そこからの船旅が半日はかかるらしい。

少し考え事しているとふと後ろに人の気配を感じとる。

ゆっくり振り返るとそこには、ルナが立っていた。

「邪魔しちゃった？」

ルナが聞いてくる。

「全然大丈夫だよ。  
早く起き過ぎて暇だったし。」

「ねえカイル……これからどうなるの？」  
「とりあえず、港町に向かうんだってさ。  
海を渡ってアカツキを目指すんだって。」

「海？海って何？」

ルナがカイルの隣に歩み寄り、聞く。

「あ……そうか、見たこと無いんだっけ……。  
うーん……大きな大きな水溜まりかな。」

「……本当！？楽しみね！」

ルナは笑いながら言う。  
目はキラキラ輝いている。

最初に助けた時よりも大分、明るくなってきた。  
これが本来の彼女なのだろう。

「寒いしそろそろ居間に戻ろうか？」

「うーん、わかった。」

ルナがカイルの服の袖を掴み引つ張る。

居間に入るとソファーにマヒロさんが座っていた。

ソファーの向かい側ではダイソンさんとガイル将軍が地図を見ながら話している。

「おはよう、ルナちゃんにカイル。あんたら早起きだねえ。」

マヒロさんが感心した様に言う。

「えー、そうかなあ。」

ルナが照れ臭そうに言う。

「ガハハハ！！お前ら！今日は大移動するからな！覚悟しておけよ！」

ガイル将軍が言う。

「まあ、気分を変えて行こうじゃないか。それに船に乗るんだしね。」

ダイソンさんが無精髭を触りながら口を挟む。

「船かあ……久しぶりに乗るなあ。」

何年ぶりだろう。

「船って私初めてだなあ…。」

ルナが興奮しながら言う。

その時、今の扉が開く。

ジンが長い袋に包まれた何かを担いで入ってきた。

「皆様おはよう！…！」

あれ？ロストは？」

「ロストならまだ爆睡しとる。」

ガイルがコーヒーを飲みながら言う。

「しょうがないなあ…最高の目覚めをプレゼントしてあげようか。」

ジンはそう言い残し、荷物をカイルに預けると寝室に入っていく。

そして寝室から爆音が響く。

ロックの悲痛な叫びが聞こえる。

寝室からロックが飛び出して来た。

「おはよう…カイルにマヒ姉さんにルナちゃん…」

こいつは朝は決まって低血圧なのでテンションが低い。

寝室の中では何かが壊れる様な音がしている。

音が止み、少ししてからロストがジンを引きずりながら出てきた。

「朝っぱらから…こいつは元気だな…。」

ロストはジンから手を離す。

「さつさと起きないのが悪いね。」

まったく…あ、そうそうロストお前に渡す物があるんだよ。」

ジンはそう言うとかイルから荷物を受け取りそれをロストに投げる。

「お前の剣折れたんだろ？」

だから用意したよ。」

「お、悪いな。ありがとな。」

そうロストは言うつと荷物を担ぐ。

「さあて、そろそろ出発しようか。」

ダイソンが上着を羽織ながら言う。

とりあえず、カイル達は準備を済ませ裏門へ向かう。

馬車の前にはルミネ少将とサラ少尉が既にいた。

「ジン大将、準備が出来ました。」



ルミネ少将が言う。

「ありがとうルミネ君。  
この砦は任せたからね。」

ジンはそうルミネ少将に伝え、馬車に乗り込む。

「カイル君またよろしくね。  
後ろの彼女は確かルナちゃんだよね？  
よろしく。」

サラが笑いながら挨拶してきた。

「よろしくお願いしますサラさん。」

サラが馬車に乗り込む。

「ワシとロストとダイソンが手綱を持つからのう。」

ガイル將軍はそう言うのと馬車の前にある所に腰掛ける。

その隣にロストとダイソンが座る。

そしてロックが先に馬車に乗り、カイル、ルナという順番で乗り込む。

最後にマヒロが乗る。

馬車の中は広がった。

カイルの左隣にルナが座り、右にはロックが座る。

そしてロックの向かい側にはサラが。

カイルの向かい側にはジンが。

ルナの向かい側にはマヒロが各々座っている。

「ほら、出発するぞ!!」

ダイソンさんの声と共に馬車がガタゴト動き出す。

外ではルミネ少将が手を振っている。

手を振り返す。

馬車は砦を出て港町マイロタウンへと向かう。

目指すはアカツキ国。

## 第16話【港町へ】

馬車の中。

「カイル君には自己紹介したけど、私はサラって言うの。よろしくね。」

サラさんが簡単に挨拶する。

「よろしくお願いしますサラさん。」

ルナがサラさんに言う。

しかし妙だ。

隣に座っているロックが静かだ。

いつもなら真っ先に騒ぎ出すのに、今日は馬車に乗ってから一言も喋っていない。

「おい、ロック……………」

ロックに話しかけるが、途中で言葉が詰まってしまった。

何故なら…ロックの顔はなんとも言えない表情で、視線はサラさんに釘付けだったからだ。

まさか…とりあえずロックの目の前で手を振る。

反応をしめさない。

これは重症だ。

「ロック君？…変な物でも食べたのかい？」

ジンがその様子に気付きニヤリと笑いながら言う。

「いえ…大丈夫ですよ…」

そうロックは言う。馬車の外の風景に目を移す。

ジンの隣でマヒロが必死で笑いを堪えていた。もちろんカイルも必死で笑いを堪えている。

「ねえカイルどうしたの？」

場の状況が掴めないルナが聞いてくる。

「後で…詳しく…説明するよ…。」

笑いを堪えながら詰まり詰まり言う。

「えー…つまんないの…。」

ルナが肩を落とす。

「そうだルナちゃん。  
外を見てごらんよ、  
良い景色だよ。」

マヒロさんがフォローしてくれた。

「ねえマヒロさんあれ何ー？」

ルナがマヒロさんに向けて質問攻めを開始する。

しかしマヒロさんは素早く正確に次々と優しく答えていく。  
優しい母親みたいだ。

その時ロックが、

「なあ…カイル…俺…俺…」

と呟いてきた。

「ああ…それ以上言うなロック…。わかってるって…。」

「一目惚れだぜ……………」

そうロックが呟いた瞬間、堪えきれずに爆笑してしまった。

ジンも思い切り笑いこぼる。

「お前ら酷い！…！酷過ぎる！…！」

笑う事は無いだろう！…！」

ロックが叫ぶ。

「だって……………ロック君……………真顔で……………言うから……………ツボに入  
った……………んだもん……………ははははは！…！」

ジンが腹を抱えて爆笑しながら言い訳をする。

「ジンさん……笑い過ぎ……は……はははは……!」

笑いが止まらない。

誰か助けてくれ。

「真顔で一目惚れは反則だよねサラ君……あー…腹痛い。」

ようやく平静を取り戻したジンがサラに向かって呟く。

「えー私に惚れたら、火傷するぞ。」

とウインクしながらサラさんがロックに向かって冗談半分で言う。  
冗談半分なのだ…が。

「は……は……は……!」

と顔を真っ赤にしながら、情けない声を発しカクンと気絶した。

「あちゃー……またか……」

ロックは興奮し過ぎてたまに気絶する癖がある。  
不健康さならではの癖だ。

「え……? ちょっとロック君!」

サラが慌ててロックに近付き肩を掴んで揺らす。

「大丈夫ですよ、サラさん。」

しばらくしたら目覚めますよ。」

「そう…？　なんか悪い事しちゃったかな？」

「サラ君、まあロック君なら大丈夫だろう。」

ジンがどこから取り出した本を片手に言う。

「そろそろマイロタウンに着くよー！！」

ダイソンの声が響く。

「もう着いたのか。」

ほらカイル君ロック君を叩き起こしてやりなさい。」

とりあえずロックの頬にビンタを喰らわせる。

「……ん……ああ……おはようさんカイル。」

「ロック君大丈夫？　まさか気絶するとは思わなかったから……」

「全然大丈夫ですよ。」

いつもの事ですし。」

と冷静になったロックが言う。  
気絶した後は決まって冷静だ。

馬車が止まった。

「よし、マイロタウンに着いたぞー。」

ダイソンさんの声が響く。

「カイルー早く早くー。」

既に馬車から降りていたルナがカイルの服の袖を掴み引つ張りながら急かしてくる。

「はいはい、今降りるよ。」

馬車から降りる。

賑やかだ。

今馬車が止まっているのは町の出入口のようだが、かなり人が多い。周りにはカイルが乗って来た以外の馬車が沢山停まっていた。

さらに風が吹くたびに、磯の香りが漂ってくる。

かなり海が近いのだろう。港町だから当たり前か。

「これが海の臭いかー。」

とルナはカイルの服の袖を掴んだままはしゃいでいる。意外とルナは身長が高い事に気付く。カイルとの差は大体5cm位だろうか？

「マヒロ大丈夫か？ まさか潮風が傷に染みるとか無いかな…？」

荷物を担いだロストがマヒロに寄り添いながら言う。



「ギリギリって所だね…。」

マヒロの額には冷や汗が流れている。

「早い所船に向かうかのう。」

ガイル將軍がマヒロさんを気遣ってか町中に向かって歩きだす。

「ほら行こうか。」

サラ君、ロック君、いちゃいちゃしないでよ。」

ジンさんがニヤリと笑いながら言う。

ロックの顔がまた真っ赤になった。

「ほら、ロック君行くよ！」

サラさんがジンさんに着いて先を歩く。

町の中は港町だけあって賑やかだ。

いたる所で店が開かれており、魚介類が並んでいる。

「へえー…町ってこうなっているんだー…。」

ルナが目を輝かせながら感心した様に言う。

しばらく歩くと広い場所に着く。

海が見える。左の方には栈橋に着けた大きな船がある。

「紹介しよう。あの船が僕達が乗る船『アカツキ』だ。」

これから船旅が始まる

## 第17話【神の領域】

「お前：『アカツキ』って言ったらアカツキ水軍の主力軍船の一つじゃねえか……」

ロストが啞然としながら呟く。

「でもこの軍船そこまで大きくないっすよね？これが主力軍船の一つなんすか？」

ロツクが首を傾げながら聞く。確かにこの船はそこまで小さくなく小さくもない。つまり普通の船と同じ大きさだ。

「よくぞ聞いてくれたロツク君……！！！」

この船は中に大量の武器が内蔵されているのだよ……！！」

「へえ……でも見た目はたいして普通の船と変わらないっすね……」

「ならば中を案内してあげよう……！！！」

ロツクの一言がジンさんに火をつけたようだ。

ジンはロツクの襟を掴み、軍船『アカツキ』の中に引きずり込んで行った。

「ちょっと……ジン大将待って下さいよ……！！」

サラさんもジンさんを追ってアカツキの中に駆け込む。

「よし……ワシらも乗り込むか。」

ガイル將軍が側にあつた大きな荷物を担いで船に向かう。  
ガイル將軍の後ろを歩くダイソンさんは、いつの間にか用意したの  
か釣竿を担いでいた。  
もうやりたい放題だ。  
あえてつつこまないが。

「ほら、あんた達も早い所船に乗るよ。」

マヒロさんが元気そうに言うが、かなりきつそうな表情をしている。

「マヒロさん……大丈夫ですか？」

ルナが心配そうに聞く。

「あたしは全然大丈夫だよ。」

と言いながら船に乗り込む。

「マヒロさん待ってよー」

とルナが言いながらぴったりとマヒロさんの隣に寄り添う。

後ろから見ると仲の良い姉妹みたいだ。

多分お互いも姉妹みたいに感じているに違いない。

「なあカイル…後で彼女について…世界について話したい事がある。」

ロストがカイルの隣でぼそつと言う。

「世界…ですか？ ……わかりました。」

ロストの表情を見るかぎりかなり重要な話らしい。

「とりあえず船に行こうか。」

カイルはロストに着いていく形で船に乗り込む。

船の甲板はとても広い。

見た目とは違う。

視界の端ではロックの襟を掴んだままのジンがいかにも海の男らしい格好をした、船長らしき男と話し合っている。

ダイソンさんにいたっては既に網を片手に釣りを開始していた。本当もうただの釣人のオッサンだ。

「カイル、ちょっと荷物を運ぶの手伝ってくれるかのう？」

ガイル将軍が荷物を担ぎながら聞いてきた。

「わかりましたガイル将軍。」

ガイル将軍の側にある樽を担ぐ。

「将軍、自分も手伝いますよ。」

ロストも荷物を担ぐ。

「よし、船室に運ぶかのう。」

ガイル將軍がそう呟きながら歩き出す。

とりあえずカイルとロストはガイル將軍に着いて船内に進む。

何人かの船員とすれちがった。

少し進むと船室に着く。

船室の中はそれなりに広い。

下には絨毯がひいてあり、ソファもある。

「カイル、ロスト、その荷物はそこに置いてくれるかのう。」

ガイル將軍に指示された通りに荷物を置く。

「あー…ガイル將軍…。」

ロストがガイル將軍に向かって言う。

「わかつている。」

カイル…話がある。

そこに座ってくれるかのう?。」

話とは多分さっきロストさんが言っていた、ルナについての話と世界についての話だろう。

「……話って一体なんですか?。」

腰掛けながら聞く。

「まあゆっくり話そうか。

とりあえず、ルナちゃんについてはこの前話した通りなんだが……  
…。」

ガイル将軍が懷から一枚の紙を取り出し、カイルに渡す。

その紙は『宝玉』についての報告書のようなのだ。

「とりあえず今世界に存在する『宝玉』の数が気になったからジンに調査してもらったんだが……。

一つはルナちゃんの体の中、

二つ目は…カイル、お前が持ち帰った紙に書いてあった、行方不明の赤子の中に……今はどうなっているかわからないがな。

とにかく今世界に存在するのは、たった二つなんだよ。

その二つの中でもアルタイムが把握しているのは、多分ルナちゃんの『宝玉』だけだろう。

これから予想以上に敵国の襲撃が激しくなるだろうよ。」

とロストが言う。

「今の所ルナちゃんを狙って来ている国は、アルタイムとファクトリーだけだのう。」

ガイル将軍が呟く。

「ガーデンスはどうなっているのですか？」

気になったので聞く。

「ガーデンスはアカツキと友好関係……つまり同盟国だから……。大丈夫だろう。」

つまり当面の敵はファクトリーとアルタイムらしい。

「しかし、アルタイムは魔法国家。ファクトリーは最大の軍事国家。もしこいつらが組んだなら面倒だな……。」

「……なんでアルタイムは……魔導兵器なんか作ってたんでしょうか？」

ルナは魔導兵器として実験台にされた。

何故アルタイムはそんな事をしたのか気になる。

「あー……今四カ国が資源を奪い合い、いたる所で争いが起きてるよな？」

ダイソンさんが言うにはアルタイム軍上層部は魔導兵器を作り、それを戦場に投入して戦局を引っくり返すつもりだったんだらうな。そして資源を手に入れるって言う計画だったんだらう。」

「自分勝手な理由ですね……。」

その時だった。

勢い良く船室の扉が開く。

そこには、息をきらしさらには涙目のルナが立っていた。



「マ……マヒロさんが……。」

何が起きたのか？

「……？どうしたよルナ。」

駆け寄りルナに聞く

「マヒロさんが……凄い熱で……倒れたの……」

ルナが詰まり詰まり言う。

今にも泣きそうだ。

「マヒロが！？　今マヒロは何処にいる！？」

ロストが強い口調で聞く。

「ロスト君。

そこまで強く言わないでくれ。

マヒロ君ならここだよ。」

ルナの後ろからダイソンがマヒロを担いで現れた。

「ダイソン、マヒロをこっちへ寝かせてくれるかのう。」

ガイル將軍がソファアーにダイソンさんを促す。

「カイル！　ちょっと手伝え！」

ロストに言われてマヒロさんをうつ伏せにする。

熱い。

マヒロさんの体はかなりの熱をおびている。

ロストがすぐにマヒロさんの服をずらし、背中の包帯をゆっくり剥がしていく。

「っ……………!!」

マヒロさんの横でマヒロさんの手を握っていたルナが言葉を失う。

「まずいのっ……………化膿が酷い……………」

傷口はかなり膿んでいた。

かなり無理をしていたのだろう。

「…とりあえず膿を出すしかないな…」

ダイソンさんが呟く。

「はあ…無理しやがって…」

ロストが消毒薬とハサミを取り出した。

「すまないね……………ロスト……………それに皆……………」

マヒロさんがぼそつと言っ。

「マヒロさん……………」

ルナが目を瞑りマヒロさんの手を強く握る。

その時だった。

急にルナが光に包まれる。

「……………！ カイル下がれ……………」

ガイル将軍が言う。

「……………これは……………」

ダイソンさんも慌てだす。

ルナは光に包まれたままそして目を閉じたまま立ち上がり、マヒロさんの傷口に手をかざす。

「……………え？」

思わず驚きの声をあげてしまった。

ルナが手をかざした所にある傷口がじょじょに、回復していたのだ。膿まで無くなってきた。

「そんな馬鹿な……………回復魔法だって……………？  
ありえないぞ……………」

ダイソンさんが呟く。

どんなに魔法が上手くても、天才・奇才と呼ばれた人物でも回復魔法は使えない。

回復魔法はまさに神の領域と言っても正しい。その事はカイルでも知っている。

一つルナが回復魔法を使える理由としたら……『宝玉』だろう。

少し経つとマヒロさんの傷は綺麗に治った。

そしてルナを包んでいた光も消える。

「あれ……私一体……。」

ルナはハッキリとは覚えていないようだ。

「……まあ、とりあえずはありがとうなルナちゃん。」

ロストがルナの頭を撫でる。

マヒロさんは寝てしまっている。

背中傷の跡形も無くなっていた。

「まあ 結果オーライだね。」

そうそう、そろそろ船が出発するみたいだね。」

ダイソンが呟く。

確かに船が揺れ始めている。

「あー： ガイル將軍達は甲板に先に上がっていて下さいよ。  
マヒロは自分に任せて下さい。」

ロストが言う。

「うむ そうだのう。」

ワシとダイソンは釣りでも楽しむか！！」

ガイル將軍が笑いながらダイソンの肩を叩く。

「それじゃ自分もルナと一緒に甲板に行きますよ。」

とりあえずルナを連れてダイソンさんの後を着いて甲板に向かう。

「それじゃカイル君 私達はあっちで釣りでもしてるよ。  
用があつたら遠慮せずに呼んでくれよ。」

「それじゃあ船旅を楽しめよカイル！！！」

二人はそう言い残し、船の後ろの方へ歩いていった。

ルナは海を見ながらはしゃいでいる。

空が青く風が気持ちいい。

船はマイロタウンから大分離れたようだ。

視界の端ではロックがサラさんと喋っている。

まあ一応、応援してやるか。

その反対側ではジンさんが仰向けに倒れている。  
本当に船には弱いらしい。

そういえば、ジンさんも『十三武神』の内の一人『千里眼』と呼ばれているらしい。

意外だ。

まあ人は見掛けによらないから見た目だけで、判断するのは失礼だ。  
とりあえず出港までは予定通りだ。

これからどうなるかはわからないが。

## 第18話【海上で】

「海って広いねー。」

ルナが船から身を乗り出しながら言う。

「本当、広いよね。」

船の左側からは陸が見えるがカイルがいる右側からは、果てしなく続く海が見える。

視界の端ではジンさんが真っ青な顔色でフラついている。

「ところでさっき私一体どうしちゃったのかな？」

ルナが首を傾げながら聞いてくる。

「何も覚えてないの？」

確かあの時ルナは光に包まれた。  
そしてマヒロさんの傷を治した。

「うーん…はつきりとは覚えてないの…。  
だけど……。」

「…だけど？」

全く覚えてない様だが何か引つ掛かる事があるのだろうか。

「だけどね…あの時…マヒロさんの傷が早く治る様につて強く想つたの。」

それだけは確かに覚えているの。」

つまり大切な人を想う力。

その想いに宝玉が答えた…むしろ力を貸したというのか？

宝玉…ただの魔力の塊なのか…？

「ちょっとカイル、何気難しい顔してるの？」

ルナが眉をひそめながら聞いてきた。

「…なんでもないよ。」

とりあえず笑顔で誤魔化す。

「ははっ…良い雰囲気だね…お二人さん…。」

後ろからジンさんが立っているのもやつとの表情で話しかけてきた。

「良い雰囲気だなんてそんな…。」

ルナが顔を真っ赤にしながらジンさんの背中を軽く押す。

その瞬間ジンさんは派手に倒れた。わざとらしいが、多分本当に倒れたのだろう。

「ちょっとジンさん、しっかりして下さいよ。」

とりあえず倒れているジンさんを起き上がらせる。



「いやあ…本当に船には弱くてね……。」

申し訳なさそうにジンさんは立ち上がる。

「大丈夫ですか？」

ルナも心配そうにしている。

「ははは…心配ご無用…。」

この僕を舐めてもらっちゃ困るよ……。」

そう言った途端にジンさんは仰向けに倒れた。

船に弱いつてレベルじゃない。

例えるなら船アレルギーって所だ。

「……………ねえカイル…ジンさんどうしよう……。」

「とりあえず日陰に寝かせておこうか……。」

ひとまず、船のメインマストの陰にジンさんを引きずりそして寝かせておく。

「ジンさん大丈夫かな……？」

ルナが心配そうに聞いてくる。

「まあ大丈夫だよ。」

一応、立派な人だし。」

側にあつた麦わら帽子を手に取り、ルナの頭に被せる。

「ありがとう」

とルナは嬉しそうに言つてまた船から身を乗り出しながら海を見つめだす。

「よう、カイル！さっきぶりだな！それにルナちゃんもさっきはありがとうな。」

ロストさんが不意に後ろから現れた。

「あっロストさん！

あの…マヒロさんは…？」

ルナがおずおずと聞く。

「アタシならここだよ、ルナちゃん。」

マヒロさんがロストさんの陰から顔を出す。

「良かったあ…マヒロさん…。」

ルナがマヒロさんの胸に飛び込む。

微笑ましい光景だ。

「本当に姉妹みたいだなお前ら。」

ロストが双眼鏡で海を眺めながら呟く。

「まあ良いじゃないですか。」

頼れる人が居ることは良い事だとカイルは思った。

その時だった。

カイルの隣に居るロストの動きが止まった。

「ロストさん…？どうしたんですか？」

「……やっぱり来やがった…！」

マヒロ…！ルナちゃんを船室に案内して一緒に居てやってくれ…！  
カイル…！！ジンを叩き起こして、ガイル將軍とダイソンさん達を  
呼んで来い…！！

船長…！！奴らだ…！！海賊が来やがった…！！  
応戦の準備だ…！！」

海賊…出港前にジンさんが言っていた。

「ルナちゃん、とりあえず船室に行くよ。」

マヒロさんがルナを促す。

するとルナがこちらへ駆け寄ってきて、

「カイル…絶対…戻って来てね……。」

そう言うときまたマヒロさんの所に駆けていき、そのまま船内に入っ  
て行った。

海賊…負けられないな…と心から思いながらガイル將軍とダイソン  
さん達を呼びに行く。

これから海賊との戦いが始まる…。

## 第19話【海賊船】

「ジンほら起きろ！！  
海賊が来やがったぞ！」

ロストが倒れているジンの頭をはたく。

するとジンは飛び起きてロストから双眼鏡を奪い、海を凝視し始める。

「それで、海賊はどこかのう。」

ガイル将軍が騒ぎを聞き付けダイソンさんと一緒にやって来た。

「とりあえず今はちょっと離れた所に居るんですが…。  
そろそろ肉眼でも見えますよ。」

ジンが双眼鏡を覗きながら呟く。

確かに海賊船が見えてきた。

「ほー……あれが海賊船っすか。」

いつの間にかロックとサラさんも来ていた。

確かに海賊船らしき船が見える。  
帆にはドクロマークがある。  
まさに海賊船って所だろう。

「うーんこのまま向こうが気付かずに行ってくれれば、一番良いんだけどね……」

ダイソンさんが服の袖を捲りながら呟く。

「ええ、確かにそうですよね。」

カイルはダイソンさんに言う。

危険な事は少しでも少ない方が良い。

「うーん……一応、いつでも応戦出来る様に砲台を使う準備をしておいてくれ 船長。」

ジンさんが船長に指示をする。

甲板が慌ただしくなる。

船員が駆け回っている。

すると急に船から低い音が響き始める。

「これが軍船アカツキの本当の姿だよ……!」

ジンさんが自慢気に言う。

確かに船の横側からは砲身が飛び出しており、甲板にもいくつかの砲台が準備されていた。

「流石ってところだな……。」

ロストが感心したように呟く。

「まあアカツキ船舐めてもらっちゃ困るよ。

……よしとりあえずサラ君、僕の弓を用意してくれないか？」

「ジン大将、弓なら用意してありますよ。」

サラさんが巨大な機械弓をジンさんに渡す。

「……………君ルミネ少将とそっくりだね……………」

ジンさんはなんとも言えない表情で呟く。

「そんな事は無いですよ。

…ね？ ロック君。」

サラさんが笑いながら言う。

八重歯が目立つ。

ロックは顔を赤らめながら首を縦に振っている。

「っ……………」

奴らこっちに気付いた…。

船長！！ 舵を思い切り左へ！！

撃ってくるぞ！！」

双眼鏡を覗いたままロストが叫ぶ。

視界の端では船長が舵を操っている。

海賊船から爆音が響く。

そしてアカツキ船の右手に砲弾が着弾した。  
水しぶきが高く高く上がった。

船が激しく揺れる。

「うわわわわ……!!」

ロツクが情けない声を漏らす。

「こちらも撃ち返すか。」

一、二、三、四番砲……撃て!!!」

ジンさんが叫ぶ。

アカツキ船の横側から爆音と煙が上がる。

海賊船から少し逸れた所に着弾した。

海賊船も撃ち返してくる。

激しい撃ち合いだが、お互い船に損傷は無いようだ。

「ちょっと……海賊船がこっち突っ込んで来てますよ!!!」

カイルは言う。

明らかに海賊船は船首をこちらに向け突っ込んで来ている。

「こっちの船に横付けして乗り込んで来るって戦法かのう……」

ガイル將軍が斧を担ぎながら呟く。

「本当めんどくせえ……」



ロックも槍を持つ。

そしてアカツキ船全体に衝撃が走る。

アカツキ船の横に海賊船が横付けしてきて、橋を架けたのだ。

「いかにも海賊面って感じの奴らだな…。」

ロストが新しい大剣を構えながら呟く。

歓声を上げながら次々と海賊が橋を渡って攻めこんできた。

カイルはロックとサラさんと一緒に敵に対応する。

サラさんは槍を武器として振るっている。

視界の端では船室への入口の前で、仁王立ちしながら斧を振り回す  
ガイル将軍が見える。

ジンは弓で的確に矢を射っていく。

ダイソンさんは素手に魔法を宿しながら敵を海に叩き落としていた。

カイル自身も刀で敵の攻撃を時には防ぎ、避け、次々と命を奪って  
いく。

「ちよっ……こいつら!!」

ロックが敵を突きながら呟く。

「どうしたんだよ！！まさかもつダウンか！？」

「これしきでダウンするか！

こいつら…なんかおかしい…。」

「おかしい……………？」

……確かに……何か違和感がある。

海賊達は士気が高い。

ただ…何かに…脅えているようにも見える。

さつきから何人も海賊を斬って来たが、その斬った海賊の仲間の海賊は顔色一つ変えずに攻撃をしてくる。

いくら海賊とはいえ仲間が目の前で斬られて焦らない奴などいない。

彼等は何かにつき動かされている。

「気付いたかよカイル…。」

嫌な予感しかないよ…。」

ロックが向かってきた海賊を蹴り飛ばしながら呟く。

「ああ…気を付けようか…。」

視界の端ではロストさんが大剣を振るい、敵を吹き飛ばしている。

今の戦況は、数では確実に海賊の方に分がある。

それに海賊は士気が高い。

だがガイル將軍達が次々と海賊を倒していつているので戦局が引っくり返るのも時間の問題だろう。

その時だった。

「……あー……てめえら……なに苦戦してやがるんだあああああ！！！！！！」

海賊船から獣の雄叫びの如く怒鳴り声が響く。

海賊達はピタリと動きを止める。

海賊達の表情は恐怖の色に染まっていた。

「……どうしたのかしら……？」

サラさんが手を止め呟く。

流石にカイル達も攻撃を止める。

すると一人の海賊が海賊船に駆けていく。

「船長………だってあいつら、やけに強いんですぜ……。」

海賊は脅えながらその姿が見えない船長に言う。

「……情けねえなあオイ………お前らそれでも海賊か！？」

海賊船の船長が怒鳴る。

「ひい！！……すいやせん……でも……。」

「あああ！！」

もういい！俺が行く！！！！」

そう海賊船の船長が怒鳴り、そして姿を現した。

派手な帽子を被り、正に海賊の当主みたいな格好だ。  
髪の色は灰色。

「まったく……！！！」

情けねえ部下どもが世話になった様だな！！！！」

「君が海賊の船長か？」

「あー…そうだ。

一応船長だ！」

「なあ船長さん、ここはお互い退かないかい？  
こっちは急いでるんだが。」

ジンさんが提案する。

「はあ！？

何つまらねえ事を………あ！！！！  
良い事を思い付いた！！」

「良い事？」

カイルは思わず聞いてしまった。

「良い事だ緑髪の兄ちゃんよ!!  
簡単な事だ!

俺と一騎討ちしてお前らが勝ったら、  
俺ら海賊が退く。

もしお前らの代表が負けたら……。」  
「負けたら……?」

今度はロックが聞く。

「負けたら……金目の物根刮ぎ頂こうか!!!!!!その不健康そ  
うな兄ちゃんよ、わかったか!!!!」

つまりあの船長と一騎討ちして勝てば退いてくれるらしい。  
負けたら金目の物を海賊に渡す。  
実に簡単だ。

「さあさあ、どうするよ?  
そのシヨボくれた顔で弓を持つてる兄ちゃんよ!!!!」

とジンさんを指差しながら言う。

視界の端ではロストさんが笑い転げている。  
多分、海賊の船長が言ったシヨボくれた顔がツボに入っただろう。  
サラさんも笑っている。

「……よし、良いだろう!!!!!!  
条件を飲もう!!!!」

ジンさんが叫ぶ。

「よし!!!」

なら代表を決める!!!

そのメガネのオッサンか？

金髪の兄ちゃんか？

はたまた斧担いだオッサンか？

誰だ!？」

船長がサーベルを抜き構えながら聞く。

「ガハハハハ!!!」

代表はカイル!!!! お前が代表だ!!!!」

はい？

聞き間違えたか？

いま自分の名前が呼ばれた様な…。

ロックの方を見る。

ロックは笑いながら肩を叩いて来た。

「はあ……………わかりましたよ……………戦いますよ……………」

後戻り出来ない。

とりあえず刀を鞘から抜く。

日の光を受け鈍く光る。

「頑張れよ!!!!」

ダイソンさんが励ましてくれる。

「ガハハハハ！！お前なら大丈夫だ！」

ガイル将軍が高らかに笑う。

ロストさんはこちらに向かつて親指を立てて

「大丈夫」と言うサインを送ってきた。

「おう！！緑髪の兄ちゃんか！！！」

よし…始めるか！！！！

野郎共！！！！お前らは船に戻ってろ！！！！！」

そう船長が怒鳴ると海賊達は素早くアカツキ船から退散して海賊船に戻った。

甲板で、サーベルを構えた海賊の船長と刀を構えたカイルが睨み合う。

視界の端ではガイル将軍達がこちらを見守っている。

「お手並み拝見といこうか！！！」

船長が突っ込んで来た。

そしてサーベルで斬りかかってきた。

刀で受ける。

火花が散る。

「さあさあ次々と行くぜえええ！！！！！」

海賊の船長は雄叫びを上げ、次々と斬撃を浴びせてくる。

「うわっつとっ…!!!!」

思わず声が漏れる。

致命傷になりそうな斬撃だけを受け流し、後は体を捻り避ける。

「……!!!!」

なかなかやるじゃないか!!!!」

海賊の船長が称賛の声を上げた。

「誉めても何も出ませんよ!!!!」

踏み込み真一文字に斬りつける。

「甘えな!!!!踏み込みが足りねえ!!!!」

船長は後ろに軽く飛ぶ。

そこが狙い目。

唯一のチャンスだ。

空中ではどんな奴だろうと身動きがとれない。

もう一步踏み込み突きを放つ。

もらった。

「良い考えだが、相手が悪かったな!!!!!!」



刀が動かない。

船長はサーベルを持っていない方の手で刀を掴み突きを止めていた。

「……………マジですか……………」

まずい。

反撃を喰らう。

歯を悔い縛る。

「ほらよ喰らえ……！」

船長は刀を掴んだままカイルの右脇腹に蹴りを放つ。

「がつ……………！！！！！！！」

重い一撃だ。

鈍い何かが折れた音がした。

肋骨がいかれたのだろう。

気が付くとカイルの足は甲板を離れ、カイルは2・3m左に吹き飛んでいた。

「もう終わりか？」

まあ、なかなか良い線いってたんだがな。」

船長がこちらにゆっくりと近付きながら言う。

「まだまだ……………！！！！！」

口ではなんとも言えるが、かなりあの一撃が効いている。  
どんな脚力だ。

どうにか立ち上がったが、刀は反対側に落ちている。

絶体絶命とはこの事だろう。

その時だった。

「カイルー…約束は絶対守ってよね……！」

後ろから彼女の……ルナの声がした……。

そうだ。負けられない。

カイルを中心に風が渦を巻く。

「……やっと本気を出すか……！  
面白くなってきたなあオイ……！」

船長はサーベルを再び構える。

カイルの右手に風が渦を巻きながら集まり、剣の形を造る。

その風の剣を振るう。

風の刃、カマイタチが船長を襲う。

「……………！！！！くっ！！！！！！」

船長が唸る。

海にもカマイタチが当たり、水しぶきが高く高く上がる。

上がった水しぶきが雨の如く船に降り注ぐ。

これ以上は限界だ。

剣の形を造っていた風は無くなり、魔法の反動が意識が朦朧としてきた。

降り注ぐ水で船長の姿を確認出来ない。

少しして水が止む。

そこには船長が笑いながら立っていた。

負けた。

純粹にあの船長は強い。

船長はゆっくりとカイルに近付く。

そして肩を叩く。

「お前の勝ちだ。

負けたよ。

なかなか楽しかったぜ！！！」

「はい？………なんで？」

驚きを隠しきれず聞いた。

「俺の命より大切な帽子が真っ二つだぜ！」

つまり俺の負けだよ。」

確かに船長が手に取った帽子が真ん中から綺麗に切断されていた。

「……良いんですか？」

せつかく稼げるかも知れないのに。」

「良いんだよ。それにお前ら訳有りっぽいしな。  
それにお前良い目をしているからな！」

船長はサーベルをしまいながら言う。

「ところで…兄ちゃんよ…その頭の髪飾りはどこで手に入れたんだい？」

「え？ これは自分が拾われた時にはもう持っていたらしいんですよ。」

「拾われたって事は親の顔を知らないのか……………」

「ええ…。そうなんですよ…。」

「……………まあ、とにかく約束は約束だからな。」

俺ら海賊は退くよ。

えーとカイルだっけな？

縁があつたらまた会おうや！」

船長は手を振りながら海賊船へと向かう。

「船長！！！！あんたの名前は！？」

船長の背中に語りかける。

船長は一瞬振り向き、

「ランスⅡタイタンって名前だ！！覚えておけよ！！！」

そう言うとき海賊船に飛び乗り、海賊達に指示し始めた。

アカツキ船に架けられていた橋も回収して、海賊達は去って行った。

違う所で会っていたらきつと……………。  
と感ぜてしまふ程の人だつた…。

時は昼過ぎ。

とりあえず問題は一つ無くなつた。

これからどうなるのか…。

## 第20話【十三武神】

「カイルー……心配したんだから……」

ルナがこちらに駆け寄ってきて涙目のまま呟く。

「ごめんな。」

つか船室に居たんじゃないのか？」

「この娘ったら、カイルの所に行くって言って走り出すんだもの。驚いちゃったよ。」

不意に現れたマヒロさんがルナの頭を撫でながら言う。  
ルナは顔を赤くしてうつ向く。

「ガハハハハ！」

どうにか勝った様だのう、カイル！」

ガイル将軍が笑いながらやって来た。

「…自分は完璧に負けましたよ将軍。

あの船長、只の海賊じゃあないですよ。」

人間としての器もただ者ではない。

それに、髪飾りについて何か知っている様子だった。  
出来ればまた会って話してみたいものだ。

「まあ結果オーライだね。

そろそろまた出発しようか。」

ジンがいつの間にか側に立っていた。

船が再びゆっくりと進み出す。

「それじゃまた私とガイルは釣りでもしてくるよ。」

ダイソンさんは麦わら帽子を被りガイル將軍と一緒に船の後ろの方に歩いて行った。

単なる釣り好きのオッサン二人だ。

「あの人釣りが好きなんだなあ…。」

サラさんが呟く。

「まあ良いじゃないかサラさん。あの二人古い仲らしいですし。」

ロックが言う。

確かにあの二人は昔からの戦友らしい。

「とりあえず、各々好きな風に時間を潰そうか…。」

そうジンは言うと言手は倒れた。

船酔いの再発だろう。

「ジン大将!？」

ロック君、ジン大将を運ぶの手伝って!!」

サラさんが慌てて言う。

「了解しましたよつと。」

ロックはジンさんを担ぐとこちらに手を振り、サラさんと一緒に船室の中に消えた。

「……………本当相変わらず船には弱いな…。」

ロストが苦笑しながら呟く。

「船酔いって大変そうだね…。」

ルナが呟く。

「大変だよな実際…。」

かなりキツイに違いない。

「まあジンなら大丈夫さ。  
なかなかしぶといからね。」

マヒロさんが呟く。

「そうだマヒロさん！  
色々教えて欲しい事があるんだけど、あっちに行こうよー。」

ルナがマヒロさんの腕を引っ張って船の前の方に歩いて行った。

本当、仲が良い。

「本当、仲が良いよなあ…。」



ロストがルナとマヒロさんを見ながら言う。

「そうですね……。」

ところでロストさん。

聞きたいことがあるんですけど……。」

「ん？何だよ。」

前々から思っていた疑問をぶつける。

「『十三武神』についてなんですけど……。」

「ああ、『十三武神』についてか。

知らないのなら詳しく説明してやるよ。」

「すみません。お願いします。」

気になっていた事だったので、説明をお願いした。

「とりあえず『十三武神』って言うくらいだから、十三人の将軍が数えられているんだよ。」

アルタイムに三人、ファクトリーに三人、ガーデンズに三人、アカツキに三人。

各々の国に三人ずつ所属しているんだ。」

四カ国に三人ずつ………確実に計算が合わない。

三×四＝十二明らかに一人足りない。

「あー…言いたい事はわかる。

後の一人は傭兵なんだ。

『十三武神』の中でも最強の武力を誇る傭兵。

名前は知らないが確か…『天下無双』って言う派手な異名がついてたなあ…。」

『天下無双』…噂なら聞いた事がある。

とある山賊とファクトリーが戦をした。

数は天地の差でファクトリーが圧倒的だった。

だがたまたま『天下無双』が山賊に雇われていたらしい。

『天下無双』単騎でファクトリーの大軍を突破し、ファクトリーの將軍を討ち取ったと聞いた。

討ち取った後も圧倒的な『天下無双』の武力で戦場はファクトリー軍の兵の血で、真っ赤に染まったらしい。

「ほかの『十三武神』について知っていますか？」

『天下無双』の話聞いて、興味が湧いてきた。

「あー…すまんがあまり知らないんだ。

今の所知ってるのは、『究極の鉄壁』、『千里眼』、『天下無双』、後は『暁の虎』だな。」

『暁の虎』は初めて聞いた。

『究極の鉄壁』はアルタイムのアルベルト大将。

『千里眼』はアカツキのジンさんの事だ。

「『暁の虎』ってのはなんですか？」

「『暁の虎』はなアカツキ軍の中將だ。

知り合いなんだが……まあお前も会えば異名の由来がわかるさ。」

ロストはニヤリと笑う。

用は見てからの楽しみって事だろう。

「教えて下さりありがとうございます。」

一礼する。

「すまん。

あまり詳しくなくてさ。」

「そんな事はないですよ。

ところでロストさん、後どのくらいで目的地に着きますかね？」

「うーん……後どのくらいだろうな……」

とりあえず、港町ログタウンに着くのは夜になるだろうな。」

「って事はログタウンで一泊するって事ですか？」

「ああ。

とりあえずはそうなるな。」

今はまだ昼過ぎなので船旅はかなり長くなりそうだ。

「久々にのんびり出来そうですね。」

「最近は何々起こり過ぎたからな。」

アルタイムを裏切り、ルナを助け、ジンさんと出会い、今はアカツキを目指している。

激動の日々だ。

「まあ、争いが絶えないのは変わりないですね。」

「四カ国が資源を奪い合う戦争……ラインの民達は迷惑だろうな。」

「ええ……。」

難儀な話だ。

各々の国が国の為に資源を奪い合う。

ラインの民はただ単に巻き込まれ命を落とす。

「暗い話は止めようか。」

考えるだけで頭が痛くなる。

まあ明るい話題も無いけどな。」

ロストは苦笑しながら呟く。

「そうですねえ……。」

「……………うつ……………俺もあの馬鹿息子みたいに酔ってきた……………。船室で休んでくる……………。」

ロストはそう言い残し船室に消えた。

ロストとしばらく話し込んだのでけっこう時間が経っていた。  
日は少し傾いている。

視界の端ではマヒロさんとルナがダイソンさんとガイル將軍と一緒に釣りをしている。

風が吹く。

天気は快晴。

順調に船はログタウンを目指して進む。

## 第21話【二度目の電撃】

「天気は気まぐれだよ。

まさに乙女心と同じ様に。」

隣に居るロックが染々と呟く。

「何を急に……。

口より体を動かせ！」

カイルは目の前の荷物を船内に投げ込みながら言う。

カイルとロックは今、船員達と一緒に甲板の上を駆け回っている。

正確には先ほどから急に降り出した豪雨と暴風の為に荷物やマストを畳んだりと、手伝いをしているのだ。

「さっきまでは快晴だったのによ……!!」

ロックも樽を船内に投げ込みながら言う。

「知るか!!」

ほら次!!」

バケツリレーの様にカイルが荷物をロックに渡し、ロックが次々と船内に荷物を叩き込む。

「それに理不尽だぜ!

ガイルのオッサン

「一番若いお前らが頑張れ!!!!ガハハハ!!!!」って言って俺

らに任せやがつて！！！！  
理不尽過ぎる！！！！」

「理不尽だけど仕方ないだろ！！！！  
確かにあの中じゃあ、俺とロックが一番若いんだからな！！！！」

「ああもう！！  
傭兵なんか辞めて転職してえよ！！！！」

ロックが最後の箱を船内に投げ込んだ後叫ぶ。

「漁師にでもなつとけ！！  
ほら次はあの荷物だ！！！！」

その瞬間、辺りに爆音と共に閃光が走る。

「うわわわっ……！！  
雷かよ……いよいよヤバくなってきたな！！！！」

「早く済ませて船室に戻るぞ！！！！」

出来るだけの早さで荷物を片付ける。

少しばかりするとカイルとロックに割り振られた仕事が終わった。

服はすぶ濡れ、髪からは水が滴り落ちていた。

船室に戻ろうとしたその時だった。

「……なあ、俺相性の良い魔法って雷だよな…。」

ロックは右手を掲げながら急に呟く。

こいつとは長い付き合いだから大体考えている事はわかる。

「お前……まさか……！！！」

やめ………」

止めようとしたが遅かった。

この馬鹿はこのタイミングで雷の魔法を試す気だ。

そして次の瞬間。

稲妻が天から落ちてきてロックの右手に直撃した。

「ぎゃあゝあゝあああああゝ！！！！！！」

目を覆いたくなる光景だ。

人生を経験していて二度も電撃を受ける奴は少ないだろう。

しかし、何故あのタイミングで魔法を試す気になったのか不明だ。

とりあえず、雨の中稲妻が直撃した体勢のままつつ立っているロックを担いで船内に駆け込む。

「ロック…お前頭平気か？」

「いやあ……雷見たとき、ふと相性の良い魔法について思い出してさあ……。」



前回のジンさんの電撃で耐性が付いたのか、あまり雷が効いて無いようだ。

「焦臭くなつたな……。」

ロックの頭からは湯気が出ている。  
髪はチリチリになっていた。

「とりあえず着替えたいよ……。」

ロックが上着を脱ぎ絞りながら呟く。

二人共ぐつしより濡れている。  
下手をしたら風邪をひくだろう。

二人はトボトボと船室に向かう。

船室に入る。

「ちよつとロック君!?  
どうしたのよ?」

サラさんが変わり果てたロックの姿を見て驚く。

「ちよつと雷が直撃しまして……。」

ちよつとではない。  
確実に直撃していた。

なにせ全身の骨が透けて見えていた位だから。

「ガハハハハ！！！」

悪運だけは強いからのう。」

あんたのせいだよガイル將軍。

とカイルは心の中で呟く。

「あんた達びしょ濡れだねえ…。

向こうで着替えて来なさいよ…。」

マヒロさんが言う。

とりあえず別室で着替える。

着替え終わった頃にルナとサラさんがタオルを抱えて現れた。

「はいカイル。

お疲れ様。」

ルナがタオルを渡してくれた。

「ロツク君大丈夫？」

サラさんが心配そうに聞く。

「大丈夫ですよ。前にジンさんからも電撃喰らいましたから。慣れましたよ。」

「あの大將そんな事したの！？

やりかねないけど……」

ガクリとサラさんはうなだれる。

「ジンさんの評判は良いんですか？」

思わず問いかけてしまった。

「あの人の将軍としての評判は高いわ。

ただ……お茶目過ぎるのよね……」。

ラスク砦の一階から最上階まで、箱に隠れながら兵にばれない様に進んだり、兵士の訓練に乱入なんて当たり前。

変な実験をして部屋が丸々一つ吹き飛んだ事もあったわね……」。

最早お茶目どころではない。

まあ親近感を持ちやすいが。

「大変なんですね……」。

でも頼りになりますよねジンさんは。」

ルナが言う。

「そうかい？ありがとうございます。」

後ろを振り返るとフラフラとしたジンさんが立っていた。

「大将……まさか……聞いてました……？」

サラさんがロックの陰に隠れながら言う。

「全然。」

お茶目過ぎるってところからしか聞いてないよ。」

つまり全部聞いていたって事だ。

「まあまあジンさん落ち着いて下さいよ。」

ロックがささずサラさんをかばう。

「いやいや、お茶目なのは自覚しているからね。むしろ狙ってやっているんだけどね。」

鼻唄混じりでジンさんは荷物をまとめ始める。

「そろそろ到着なんですか？  
海楽しかったのに……。」

ルナが肩を落とす。

「これから先、何回でも海には来れるよ。  
生きている限り、海より楽しい事があるからね。」

ジンさんはルナの頭を軽く叩く。

「雨も止んだし、風も弱くなってきたし、そろそろログタウンに着くから甲板に移動しようか。」

とりあえずカイル、ルナ、ロック、サラジンは先に甲板に上がった

ダイソンさん達より少し遅れて甲板に上がる。

薄暗い。

いつの間にか、日が暮れた様だ。

嵐の後は星が綺麗と言うが、本当に綺麗だ。

「ほら、あれがログタウンだのう。」

ガイル将軍が指差す方向には割りと大きな夜景が広がっていた。

「ログタウンは大きな街だよ。」

とりあえず今日はあそこに一泊するからね。」

ダイソンさんがメガネを外して言う。

とりあえず色々あったがログタウンに到着した。

「雨も止んだし、風も弱くなってきたし、そろそろログタウンに着くから甲板に移動しようか。」

とりあえずカイル、ルナ、ロック、サラジンは先に甲板に上がった  
ダイソンさん達より少し遅れて甲板に上がる。

薄暗い。

いつの間にか、日が暮れた様だ。

嵐の後は星が綺麗と言うが、本当に綺麗だ。

「ほら、あれがログタウンだのう。」

ガイル将軍が指差す方向には割りと大きな夜景が広がっていた。

「ログタウンは大きな街だよ。」

とりあえず今日はあそこに一泊するからね。」

ダイソンさんがメガネを外して言う。  
とりあえず色々あったがログタウンに到着したようだ。

## 第22話【酒場で】

くログタウンく

船を降りる。

今は夜だが街は活気に包まれていた。

酒場からは陽気な声が響き、露店が至る所で商売をしている。

「とりあえず宿を探そうか。」

「ジン大将。」

既に手配してありますよ。これから案内します。」

サラさんが先頭を歩き始める。

「本当、有能な部下を持ったな。」

うなだれているジンの肩をロストが叩く。

「カイル早く行こうよー。」

ルナがカイルの袖を掴み引つ張る。

とりあえずサラさんの後について歩く。

人で賑わう大通りを通り、少し歩いた所にある宿屋に入った。

「いらつしゃい!!!」

えくと…予約のお客かい？

名前は？」

見るからに酒場の女将という感じの女性が、宿のカウンター越しに聞いてきた。

「九人で予約のサラですけど……確か二部屋、予約しましたよね？」

「とりあえずそこのお姉さん二人とお嬢ちゃんで一部屋。後の男達で一部屋で良いね？」

そう言うと女将は鍵をサラさんとジンさんに投げる。

「荷物は部屋に運んでおくから、先に夕飯にしたらどうだい？  
ちなみに食堂は酒場と一緒にだからね。」

女将はそう続けて言うと言を鳴らす。

カウンターの奥から見習いと思われる男が現れた。

「荷物をお運びしておきます。」

男はそう言うと、荷物を大量に担ぎ、ドタドタと階段を駆け上がって行った。

とりあえず、カイル達は酒場に向かい空いていた大きなテーブルを九人が囲み座る。

広い酒場の中ではカイル達の他にいかつい船員らしき男達が沢山いた。

そして少しするとさっきの女将が大量の料理が盛られた皿と酒の瓶をテーブルの上に並べ始めた。



「うつひょー旨そう!」

ロックが喜びの声を上げる。

「どんどん食べなさいよ!!!  
ほらほらお嬢ちゃんもね!」

女将さんはルナの頭を撫でながら言つとまた厨房へと戻って行つた。

「いやあゝしかし久しぶりだねえ。こんな酒場に入るのは。」

ダイソンさんが酒を一口含んで言つ。

「そうだのう。」

お前と一緒に酒を飲むのは何年振りかのう…。」

「ガイルさんとダイソンさんは古い仲なんですか?」

ルナがコップを片手に尋ねる。

「ああ…大体……二十年位かな…。」

「懐かしいのう…。」

お前がまだ『魔鏡』と呼ばれてた事を思い出すのう…。」

「そういえばガイルお前……………」

二人は昔話に花を咲かせている。  
完全に二人の世界に入った。

「本当仲がいいわね…將軍とダイソンさん…この馬鹿二人に見習って欲しいもんだね…。」

マヒロさんが溜め息混じりに呟く。

多分馬鹿二人とはジンさんとロストさんの事だろう。

「まあまあ、良いじゃないですか。」

視界の端ではロックがまたまた料理を飲むように口の中へ流し込んでいる。

その隣でサラさんはロックを驚きの表情で見つめていた。

「腐れ縁って奴だな…こいつとは。」

ロストさんがおもむろに口を開く。

「本当だよ。こいつとは切っても切れない腐れ縁で繋がってるよ…。」

そしてジンさんとロストさんは軽く笑う。

「……何気仲が良いじゃないですか……。」

「何気ってなんだよカイル!!」

ロストがカイルの肩を叩く。

しかし…妙だ。

隣のルナが静か過ぎる。

それに何だか酒臭い。

まさか……。

「あははははは！！！」

急にルナが笑いだす。

顔は真っ赤だ。

素早く先ほどまでルナが持っていたコップの中身を確認する。

……………酒だ。

間違えたか誰かが…多分ジンさんが悪戯したのだろう。

ジンさんは満面の笑顔で笑っている。

確信犯だ。

「ちょっとルナちゃん！？」

カイルあんた水持って来なさい！」

慌てて席を立つ。

するとロックが椅子ごと後ろに派手に倒れた。

ロックの顔が真っ青だ。

「が……………う……………み……………水……………」

「カイル君！！！！こつちにも水お願い！！！！」

多分この馬鹿は料理が喉に詰まったのだろう。

慌てて水を取りに行く。

大変な状況だが……………こんなのもたまには良いと思う。

騒がしい時間が続く…。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5814c/>

---

戦場の風

2010年12月23日14時02分発行